



TOHOKU
UNIVERSITY

東北大学大学院教育学研究科 教育ネットワークセンター 震災子ども支援室 “S-チル”

講演会報告書

第3回東日本大震災後の子ども支援 災害を経験した 子どもたち

～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～



平成25年3月

東北大学大学院教育学研究科 教育ネットワークセンター
震災子ども支援室 “S-チル”



震災子ども支援室 “S-チル”
第3回東日本大震災後の子ども支援
講演会報告書

災害を経験した子どもたち

～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～

平成25年3月

東北大学大学院教育学研究科
教育ネットワークセンター

目 次

1. 開会の辞	1
2. 未来からの声を聞きながら	3
3. 講演 災害を経験した子どもたち	5
～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～	
4. 資料	23
5. 質疑応答	36
6. アンケート結果	42

開会の辞

みなさんこんにちは。本日は年度末のお忙しい中、また風が強い中おいでくださってありがとうございます。いま紹介がありましたように、「震災子ども支援室」の第3回目、開室時を含めると4回目のシンポジウムになります。ご案内のように、「震災子ども支援室」は、2011年の秋に東北大学の教育学研究科の中に置かれる形で開室しました。この「震災子ども支援室」の目的は、震災で親を亡くした子どもさんへの心理的支援が中心ですが、子どもだけではなく、子どもを取り巻く大人への支援も大変重要なものと位置づけ、大人への支援も同時に行っていきたいと考えております。

「震災子ども支援室」が行って行く支援のポイントとして、大きく3つのことがあります。1つは、「時間の中での支援」ということです。震災を経験して、その後様々な生活の変化の中で子どもや子どもを取り巻く人たちの状況が変わってきています。また、子どもの成長に伴って震災の体験の意味も変わってきます。そのような点から、「震災子ども支援室」では、時間的な展望を持ちながら最低10年間の支援を行っていくことにしています。2つ目は「関係の中での支援」ということです。支援者が次々に変わるのではなく、一人の支援者がじっくりと関わりながら継続的に支援をしていくことが重要だと考えています。それによって、何か問題が起きた時の対処型の支援だけではなく、ある種の問題が起こらないようにする予防型の支援も可能となります。3つ目は「文化を考慮した支援」です。東北と言いましても実際には地域が広く、細かく見るとそれぞれの文化があります。その点で、それぞれの文化を尊重しながら支援をしていくことが重要だと思います。

以上の点を踏まえ、今日の公開講演会では定池先生をお迎えして、奥尻の地震のその後の子どもたちの成長の過程をご紹介していただくことにしました。その中で、子どもたちの抱える問題だけではなく、子どものもつ強さや柔軟性についても我々が気づき、我々が何をしていけるのか、何をしてはいけないのか、何をしていくべきなのかという点について、ここに来てくださった皆さんと一緒に考えていけたらとよいと思います。

どうか今日は皆さんよろしく申し上げます。

平成25年10月1日

東北大学大学院教育学研究科長・教育学部長
本郷一夫

未来からの声を聞きながら

震災後2年目、震災子ども支援室（S-チル）には被災地からこんな声が届いていました。「1年目はひたすら“前へ！前へ！前へ！”、“頑張れ！頑張れ！頑張れ！”という時間だった。2年目になって、当初よりは落ち着いてきてはいるものの、ちょっと立ち止まると、「ここで何を頑張ればいいのか？」とってしまうような疲労感があり、燃え尽きたようにポカンとしてしまう。子どもたちの集中力の欠如も気になるが、それは大人も同じ」というのでした。子どもも、保護者も、学校も、行政も、多くの支援者も、コミュニティ全体に相当の疲れが溜まってきています。それでも子どもたちのために、大人たちは正常で当たり前の生活を取り戻そうと力を尽くしています。

その大人たちがとても気にかけているのが、子どもたちの未来の姿です。学校の先生方の研修会で、ある50代の先生がこうおっしゃいました。「あと10年たつと、私たちはもう退職していたり、退職間際だったりする。それは、今、目の前にいる生徒たちに引き継ぐということだ。その時にどんな「町」を引き継げるか。この10年間は、それが私たちの仕事だと思う」。しかし、私たちの道行きは、まだまだ先が見えません。せめて、道の向こう側から灯を掲げて欲しい、向こう側から声を聞かせて欲しいと思いました。

その思いに答えて下さったのが、災害研究者の定池祐季先生（北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター）です。災害社会学、地域社会学、防災教育のご専門の立場からの提言はもちろん、1983年の北海道南西沖地震を中学生の時に自ら体験なさり、奥尻島の子どもの震災後の姿を間近にみてこられた研究者です。

北海道南西沖地震が起こったのは、今から20年前、1993年7月12日のことです。地震発生3分後には津波の第一波が奥尻島に到達し、集落に壊滅的な被害をもたらしました。阪神大震災以後に注目されるようになった“心のケア”や“トラウマ”といった考え方もまだ一般的ではなく、今では一般的となった“スクールカウンセラー”も学校に配置されていない時代のことでした。あの大地震と津波を体験した子どもたちは、その後、どのように大人になっていったのか、周囲の大人たちはどのように子どもたちの成長を支えたのか。S-チルは、奥尻島の子どもの成長の道のりを教えていただきたいと思ったのでした。

本誌は、平成25年3月2日に行われた定池先生のご講演、「災害を経験した子どもたち～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～」の記録です。当日会場においでになれなかった方々にもご覧いただけることを大変嬉しく思います。先に行く子どもたちの姿を感じながら、東日本大震災後の東北がたどっていくこれからの10年、20年を思い、子どもたちにかかわる私たちがそれぞれに希望と示唆を見出していければと思っています。

平成25年10月1日

震災子ども支援室室長
加藤道代

講演

災害を経験した子どもたち

～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～

北海道大学大学院理学研究院附属
地震火山研究観測センター 助教

定池 祐季 氏

講師プロフィール

北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士（文学）。

北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター・助教。

人と防災未来センターリサーチフェロー。専門は災害社会学、地域社会学、防災教育。

北海道南西沖地震を奥尻島で経験。

公務員、NPO勤務、神戸市にある「人と防災未来センター」研究員を経て2011年4月より現職。

皆さんこんにちは。ただいまご紹介に預かりました、北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究センターの定池です。どうぞよろしくお願いいたします。まず、私の資料に誤植がありまして、通し番号で見ていくと6番までになっているんですが、2番を飛ばしてしまっていて。今日の話の流れは大きく5つの項目になります。後で数字を修正した目次をスライドで出していきますので、御手数ですが数字の訂正をして頂ければと思います。4番の方は補足という形で、1番、2番、3番の話を中心にしていきたいと思います。



まず、簡単に自己紹介をします。私は北海道の内陸部の剣淵という町で生まれました。子どもの頃は朝の気温がマイナス30度になると連絡網が回ってきて、今日は二時間目登校ですというふうに登校時間が遅れる寒い町でした。母がこの町の生まれで内陸の人です。津波に関する知識を持っていない両親のもとに生まれました。そのあと興部（おこっぺ）という人口の2倍牛がいる酪農の町で育ちまして、その次に奥尻町に引越しをして3年間暮らしました。父が転勤族でひとつの町に長く留まることがなくて、転々としていました。転勤族の親を持つと、自分のふるさとはどこだろう、自分のアイデンティティはどこにあるんだろうって思う方が多いと聞きますが、私自身もそうで、私自身は北海道出身で、心のふるすとは奥尻島ですって自己紹介するようにしています。こういう者がお話させていただきますが、今日は研究者の視点と、当時の子どもの視点でお話しします。分量的にやや多いかもしれませんが、雑駁になる部分もあると思うんですけども、至らない部分は是非先ほどの質問用紙にお書きいただいて、お尋ねいただければと思います。

では、まず北海道南西沖地震を体験した子どもたちのその後を知るために、その子どもたちが過ごしていた奥尻町と北海道南西沖地震の被災と復興の歩みを紹介していきます。冗長に感じられるかもしれませんが、その後の子どもたちの話と関わってくるところですので、ご辛抱いただければと思います。

1. 奥尻町と北海道南西沖地震の概要

奥尻町は北海道の南西部にある島で、人口が今3,033人の島です。災害の当時4,500人程いたんですけども、徐々に人口が減っています。対岸との交通は、フェリーは夏の間は瀬棚というところから片道1時間半くらいで行き来できます。江差とは片道2時間くらいで1年中運行している航路があります。飛行機は函館で片道30～40分くらいです。この飛行機は災害の時は19人乗りのプロペラ機で、体重を申告して座席を振り分けられる飛行機だったそうです。今は当時よりかなり大きくなりまして、体重を申告することもなくなりました。

ただ、昨年(2011年)の11月にJICAの研究員のかなり体格のいい方々十数名と一緒に奥尻に行った時には、こっそり席の移動を頼まれた方がいたりとか、機体が尻餅を付くので前の座席の方から搭乗してくださいという案内があったりしました。主な産業は漁業と観光の島で、漁業はイカ、ホッケ、スケソウダラや夏はウニ、鮑が取れます。親族に志向したコミュニティでもあります。極端に言うと、島のある名字の方は同じ名字の人は全員親戚だ、というような感じですが。どどこ地区の誰々さんって言うといひおばあちゃんの代まで遡って皆さん覚えていらっしゃることもあるような、そういう地域です。そういう意味で、北海道南西沖地震では、島の方にとっては血のつながった誰かが亡くなっているといっても過言ではない、そういう災害だったと言えると思います。

北海道南西沖地震の前に、奥尻島は10年前にも津波に襲われていました。日本海中部地震です。今年で30年になります。秋田沖で起きたお昼頃の地震で、この災害も津波による被害が多かったんですけども、奥尻島は当時の震度で4程度だと言われています。奥尻島には地震発生約20分後に津波の第一波が襲い、30～40分後に第二波が来ました。奥尻島に来た津波は3mから5mで、南の青苗地区というところでは2名が犠牲になりました。その津波をきっかけに青苗の一番南の岬地区というところでは4.5mの防潮堤が作られました。さらに、既存の防潮堤も同じ4.5mにかさ上げされました。高台に逃げる避難階段も含めた避難路が整備され、学校教育の中で火災に加えて地震の避難訓練が行われるようになりました。あと、島の中の多くの方がこの災害をきっかけに地震イコール津波という考え方が根付くきっかけになったと言われています。この災害というのはお昼頃の地震でしたので、私の同級生で高台の保育所にいた子とかは海の方を見ると津波が見えたという話を南西沖地震の後に聞いて、みんな津波のことを知ってたのとかかなりびっくりしました。そういう原体験というか共通体験を島の多くの方が持っている、そういう災害でした。また、日本海中部地震で2名が犠牲になった青苗地区が、次の南西沖地震でも大きな被災を受けまして、今もこちらでも問題になっている二重ローンを負ってしまったという方もいらっしゃいました。

日本海中部地震の10年後に北海道南西沖地震が発生したわけですが、今から20年前の7月12日の夜10時17分に起きた地震に起因する災害です。マグニチュードは7.8、最大震度は5と言われています。奥尻島の推定震度は当時の6と言われています。海溝型の地震でしたのでだいたい1分半くらい揺れていたようです。奥尻島はほぼ震源域に入っていて、地震が起こると同時に津波も起き始めていたとおっしゃる研究者の方もいます。この災害の犠牲者230名のうち、198名を奥尻町内の犠牲者が占めています。この中には観光客の方なども含まれているんですけども、だいたい島の方が170名程度犠牲になっている、そういう災害です。当時の奥尻島の町の予算は40億円から60億円の間にしましたが、被害総額が約664億円ということで、街の財政で再建することはとても不可能という規模の災害でした。津波、火災、斜面崩落、液状化現象などが発生しました。

7月12日、災害があった日はどんな日だったかという、ベタ風の静かな夜でした。7月から12月まで奥尻ではイカ漁の時期です。午後3時くらいに出漁して、朝方帰ってくる、漁師さん達はそういう過ごし方です。イカ漁で多くの漁師さんは海に出ていました。そういうわけで、女性と子どもだけで留守番している家庭が多くありました。つまり、お母さんがいない世帯では子どもたちだけで避難行動を起こしたりとか、お父さんがいない中残された家族で避難した、そういう人々がいたということです。また、この時期はウニ・アワビ漁の時期で、ベタ風ということで、翌朝はアワビ漁が予定されていました。アワビ漁に行く方は、だいたい前の日の夜7時前の天気予報を見たら寝ちゃうそうです。そうすると、7月12日の夜10時台というのは、イカ漁に行っている漁師さんは島にいないし、アワビ漁に行く方は夜7時ころにはもう布団に入っていてぐっすり眠っている時間帯でした。そういうわけで、お休み中に地震にあった方もいた。

北海道南西沖地震でどんな被害があったかと言いますと、フェリーターミナルがある奥尻地区では斜面崩落があって観光客、宿泊客の方を含む30名程の方が犠牲になりました。また、南の青苗地区では津波に伴う火災が発生しました。津波そのもので集落そのものがなくなってしまった、そういう地域もありました。稲穂地区という島の北には賽の河原という霊場があって、水難犠牲者などの供養のために石を積むというところなんです。積まれた石や、3軒の売店が流されてしまいました。稲穂地区では住宅の75%が被災しています。ここにあった稲穂小学校は体育館は残ったのですが、校舎が津波で壊れてしまうという被害を受けました。奥尻に支援に入られた赤十字の関係者から頂いた写真があるんですが、津波で漁船がひっくり返っている、打ち寄せられている、そういう写真です。この光景は東日本大震災が起こるまでは非常に衝撃的なものでした。3.11の後はある意味当たり前の、見慣れた光景になってしまい、複雑な思いがあります。

この写真は、斜面崩落の現場です。斜面崩落の現場近くにフェリーターミナルがあって、島の外との玄関口になっていました。このフェリーターミナルも津波でしばらく使えなくなってしまいました。斜面崩落の直後に津波が来たということで、救援が非常に困難を極めた場所です。ただ、奥尻島には航空自衛隊の基地があるんですが、地震が起こったときに、斜面崩落の現場近くで自衛隊の方々が送別会をしていました。そのため、救援要請がある前に、一島民とし



て救援に駆けつけた方々もいらっしゃって、機材のない中、手で掘って救助をしたと聞いています。

次に、災害の前の青苗地区の写真をお見せします。これは1976年の国土地理院の写真です。奥尻島は島全体的に海岸沿いの低地部に家が立ち並んでいる、典型的な漁業集落だったんですけども、低地部に住宅、商店街が張り付いています。岬の突端まで家が並んでいました。この辺りには大体80戸あったんですが、翌朝の写真を見ると、全ての家屋が流出しています。低地部にかなり津波が入ってまして、火災でも被害が出ている、そういうことが見て取れてしまう写真です。青苗地区の火災では、消防車が進めなかったということもあって、破壊消防で家を壊して最終的に鎮火させました。下町と高台を結ぶ津波の避難階段があって、高台に避難された方々は無事でした。高台の家も無事でした。

次に、奥尻の復旧、復興過程についてお話しします。今回の東日本大震災の復興が遅いといういろんなご指摘があって、私自身もその通りだと思うんですが、それに比べると奥尻島は早かったと言われています。仮設住宅については、仮設住宅が必要かどうかというニーズの把握は災害から4日目に始まっています。避難所を回って、あなたの家の被害はどうか、仮設があったら住みますかという、そういう調査を、北海道庁の職員が応援に入ってニーズ調査をしました。二週間後には第一期で仮設住宅に入居できる、そういう状態になりました。同時に復興計画の準備が始まっていたんですけども、奥尻町では独自の復興計画は無理だろうということもあり、対岸の街も被災していますので、北海道がコーディネートしました。北海道が素案を作って各町にそれを示し、それを叩き台にして議論してもらい、そういう流れで進めました。集落の再建については、先ほどの青苗地区では、80戸流出してしまった地区も含めて、全部高台に行くか、一部高台に移転してほかは元の低地部に残るかという、大きく二つの案が提示されましたが、最終的に一部高台移転となりました。最近も仮設住宅の入居期限が延びるというニュースがあったと思いますが、阪神淡路大震災以降、仮設入居が延びていくという前例ができました。北海道南西沖地震は阪神・淡路大震災の前の災害ですので、仮設の入居期限2年っていうのが当時の北海道の担当者や奥尻島の職員にとって、時間的な縛りになっていました。2年間で仮設から出て次の住まいに移るためには、逆算するとこの時期にこれが終わってないと間に合わない、そういう切迫感が非常に強かったと聞いています。そのため、例えば高台移転するとすれば、そこを宅地化するっていうことが必要ですし、低地部に土盛りをして住むのであれば、土を盛って、それが落ち着いて、ライフラインを敷設して、そこから家を建てるというと、この時期にそれが終わっていないと間に合わないっていうカレンダーがある程度頭の中にあったそうです。家を失った方々が新しく家を獲得するためにどうしたらいいかという、基本的にその考え方に基づいて進んで行きました。結局は80戸全てが流出した青苗5区は防災集団移転で高台に移転しました。それ以外の青苗地区の方は、意向調査などをして、海岸沿いの低いところは6m土を盛って、

商店街を再建して、住宅地を作って、高台に行きたいという方は高台に移転する、一部高台移転という施策が取られました。ということもあり、災害から3年経った年には住宅の新築がほぼ終了して仮設住宅がなくなるという、かなりスピーディーに住宅再建が達成されています。

さらに、災害から5年目にあたる98年3月には、町議会の中で町長が完全復興を宣言しています。過去の日本の被災地で復興宣言をした町というのは例が無いそうです。阪神淡路大震災を経験した兵庫県や神戸市などでも、復興宣言というのはいないと言われたことがあります。なぜかと言うと、復興が達成されたと感じているかは人によって様々であるのに、行政としてそんなことを言えるのかどうか。半分くらい復興しましたということも言えない、そういうふう聞いています。ただ、奥尻島で完全復興宣言をしたというのは、いろんな解釈があるんですけども、多くは、この3年半くらいで住宅の新築が終わっているということは、少なくとも建築業者、家を建てる大工さんやそういう方々は島に来なくなります。そうすると、宿泊業者や飲み屋さん、商店のお客さんはがっかり落ち込みます。復興工事はまだ続いていたんですけども、復興事業がどんどん終わっていくと、島の外から二千人くらい入ってきた工事関係者がばたっといなくなります。そうすると、もともと島に来ていた観光客が戻って来てくれないと、島の経済が成り立たない。しかし、ご記憶の方もいらっしゃるかもしれませんが、奥尻島は当時かなり「悲劇の島」として報道されました。そのおかげもあって支援をたくさんいただいたという部分もありましたけども、観光の意味では「悲劇の島」というのはかなりのイメージダウンです。さらに、そういう大変な場所に観光に行っているのかという躊躇の声もありました。そういうこともあって、安全宣言という意味を含めた復興宣言をして、私たちの島は元気になりました、どうぞ遊びに来てくださいというような、観光のPRも含めた復興宣言をしたと言われています。これは、島の人たちの言葉を聞くと、町の人たちは「復興した」という言い方をします。もしかして皆さんが奥尻に行って「復興した」と言われてもちょっと違和感を感じるかもしれません。例えば、家がきれいに立ち並んでいて商店街もきれいなんですけども、シャッターの降りているところが少しずつ増えてきています。私の知っているお店でも何店も閉店しています。島の人口は減っています。これで復興かと言う方もいらっしゃいますし、実際に復興は失敗したという方も、外部の研究に多くいます。ですが、島の人たちは「復興した」と言います。それはたぶん復興したという言葉の意味が島の人と他の人で違うからだと思うんですけども、その背景にはこの完全復興宣言にあると思います。行政として「復興した」と言っている。このときの「復興」はどういう意味ですかというふうに当時のキーパーソンの方々に聞いていくと、家を建て直したこと、商店を再開したこと、船を再び手にしたこと、大きく三つのことをおっしゃっていました。これは、失ったものを回復させるっていう意味では実は復旧にあたります。ですが、この三つが達成されたということで復興を宣言している町ということで、奥尻の人たち



は自分たちの町は復興したという言い方をします。ですから、今奥尻に言って復興について知りたいと言っても、東日本大震災の前は、「もう復興しているから今は復興じゃないよと、地域づくり、地域の課題をどう乗り越えるかということに取り組んでいるよ」、という言い方をされました。

この写真は奥尻島の青苗地区です。災害の3ヶ月後にいろんなものが片付けられた姿です。高台から下の街を見下ろしています。津波で残った、昭和初期に立てられた蔵が残っています。青苗地区は、先ほど申し上げたように、一部高台移転をしました。下の街に残った方もいれば、高台に移った方もいたんですが、青苗地区は下の街を再

建するにあたって6m土を盛っています。次は災害から10年後の2003年の写真ですけれども、ここに先ほどの蔵が残っています。手前は6m土を盛った場所です。そこに町が再建されました。この蔵は元の場所から2mくらい移動して、残してあります。これは2010年の写真で、まだここに蔵が残っています。新しい家はもちろん残っています。定点観測のように私は同じところで写真を撮っているんですが、微妙に、あ、誰々さんのうち外壁の色塗り直したんだとか、そういうことも見て取れます。同じ時期に家を建てているので、だいたい同じ時期にメンテナンスが必要になってきます。個人の住宅は個人の経済負担ですが、町の施設にも同じことが起こっていて、災害後に建築された建物は、災害から15年後くらいから修理が必要になってきました。ある建物では設備が壊れ、他の建物では雨漏りのためにバケツが置かれているのを見て、「直せないんですか」って聞いたら、町の予算の関係で、どちらから直そうか悩ましいという話を耳にしました。同じ時期に物を作ると同じ時期に壊れてくるので、そのメンテナンスの費用も計画に組み込んでおかないと、お金が足りなくて直せないということが起こってくるっていうことも、時間が経ってから気付かされました。ただし、町は義援金を原資にした復興基金は使いきりにしていましたし、メンテナンスのための費用は積んでいなかったの、町の財政を圧迫してしまう、そういうことも見られていました。

奥尻町でハードの復興が進んだということに触れる機会も多いと思いますが、その最たるものが防潮堤です。島の周囲14kmくらいを防潮堤が囲っています。一番高いところは11.7mです。これは初松前という地区で、津波で大きな被害を受けて、土を盛って町を立て

直したんですけども、そこに11mの防潮堤ができました。住宅側から見るとこの高さは大したことがないように見えるかもしれませんが、防潮堤から階段を降りて海側に行くとかなり圧迫感があります、海の側から見ると。この防潮堤の上から避難所となっている地区会館が見えますが、こことほぼ同じ高さになっています。その横には避難階段があって、さらに高台に逃げられるように整備されていました。

青苗地区というのは、岬地区80戸が高台に移転しました。『甦る夢の島』という名前で検索していただくと、この地図も含めた奥尻町の復興計画をPDFでダウンロードできます。こんなふうに復興計画を立てたんだなということを、深く知りたいという方はそちらをご覧くださいいただければと思います。

次は青苗地区です。人工地盤も作られました。元の集落の高さ、港の高さは先ほどの蔵があった場所と同じになります。海で作業をしている方々が地震にあった時に、まず階段で人工的に作られた高台に移動して、さらに山の方に逃げることを念頭に置いて作られました。人工地盤の上で町の避難訓練も行われたりしています。階段で人工的な高台に登って、そこから逃げるというふうになっています。ここまで駆け足で奥尻町の被災、復興の概要をご説明しましたが、次からが本題に入ります。

2. 災害を経験した子どもたち

災害を経験した子どもたちがどんな歩みをしたか、ということについてお話をしていきたいと思います。これは10年前の私自身の修士論文がベースになっています。私自身、奥尻島で災害を経験して、そのあと島の外で暮らした訳なんですけれども、そのあと、奥尻の子どもたちのその後について、自分の同級生も含めて非常に気になっていました。戦争のように、日本や世界の多くの人たちが同時期に経験する大きな出来事というのはありますが、北海道南西沖地震というのは、大きく被害を多く受けたのが北海道南西部の5町村です。特に特定の子どもたち、世代が、他の地域の人たちが経験していない大きな出来事に直面した時にその後の人生をどんなふうに進んでいくのか、どんな影響があるのかということ、気になって調べたというのがもとの始まりです。

奥尻町の学校教育は、当時、私が聞き取りをした2003年当時は小学校4つ中学校2つ、高校1つありましたが、現在は稲穂小学校が宮津小学校に統合されました。それで、今は小学校が、自衛隊の官舎が近いので自衛隊さんのお子さんも多い宮津小学校、役場や会社とか、割と勤め人が多い奥尻地区の奥尻小学校、そして、漁業者、民宿だったり商店の経営をされている方の多い青苗地区の青苗小学校という小学校で3つ、中学校も、私が通った奥尻中学校と青苗中学校の2つ、そして奥尻高校が北海道立の高校で高台にあります。昭和53年くらいにできた高校です。こういう学校があります。

奥尻の子どもたちの進路選択というのは、どの中学校にしようが中学校卒業後は、まず就

職か進学かという2択になります。大体災害が起きた93年頃にはほぼ100%進学していました。先ほどの奥尻高校か、島の外の高校かの2択になります。そのあと奥尻高校に進んだ場合も、就職するとなると島の中か外で就職するというパターンが出てきます。進路選択の段階で島に残れるか、島から出るかどうか、という選択に必ず直面します。高校卒業後に進学したいというと、そういう学校は島にありませんから、必ず島から出なければなりません。高校卒業後に就職する場合は、島の中に留まるか外に出るかというふうになりますが、進学する場合は必ず島の外に出る、そういう選択肢になります。これはまず、高校進学の段階で家庭の経済的な状況や自分自身の学力とかがきいてくるんですけども、必ず、進路選択と島で暮らせるかどうかということが対になっているのが奥尻の特徴です。対岸の町に通勤するということができませんので、島に残って島で働くとしたらもうそれしか選択肢がありません。このことは災害の後の大人の、選択にも関わっていました。被災して、自分の町で仕事ができなくなっても、隣町で仕事が見つかれば自分の地域にとどまって通勤するということができるかもしれませんが、奥尻の場合はそれができませんでした。ですから、仕事と住む場所というのは、一緒に考えなければいけないものだったということが言えます。

中学卒業後の進路選択ですけれども、大体の生徒は奥尻高校に進学します。さらに、将来的に島の中で就職しようと考えている子は、わざわざ島の外の高校に行くのではなくて、地元の高校に進学する傾向にありました。さらに、島の外の高校に進学する場合は函館、近隣は函館市ですとか、札幌市及びその近郊が多かったです。転勤族の子どもは、親の転勤を見越した進路選択を行う傾向がありました。

グラフをご覧になっても災害の前後で劇的に進路選択が変化したっていう印象を持たないと思います。奥尻中学校の生徒は、奥尻高校への進学が大半です。次に函館が多いです。青苗中学校も同じように、大体の子が奥尻高校、島の外の高校ですと函館が多いと言えます。奥尻高校を卒業した後の進路選択は、94年、災害の翌年度以降に進学する生徒が増えています。進路指導の先生にお話を聞くと、この頃、指定校推薦の枠、つまりは進路選択の幅が広がっていった時期と重なっています。進学先は災害前は、専門学校が多かったんですけども、指定校推薦枠が広がったということもあって4年制大学に進学する生徒も災害から10年経った2002年時点で増えてきていました。就職状況を見ていくと、これは割と災害の影響があって、島の中で就職できる枠が少し増えました。島に残りたいという子たちの意向を汲んで役場や地元企業の採用人数を増やしたりとか、復興特需の影響があって採用がちょっと増えたというふうに言われています。

これはインタビューなどの結果ですけれども、基本的に、親は子どもの望む進路を叶えてあげていました。多少苦しくても経済的に頑張ったという話もありました。当時を知る方々は、どちらかというと災害の影響よりも、生徒自身の学力が影響していたというふうにおっしゃっていました。ただ、高校3年生の場合とかは、子どもが家庭の経済事情を思いやっ

就職したと思うという話もあり、子どもが判断して進路を変えたということもあったのではないかと言えます。

今から10年前ですけれども、13名の方にインタビューをしました。災害を経験した小学校6年生から中学校3年生までの方々です。この13名は、被災の程度も住んでいた場所もバラバラですけれども、

災害が子どもたちの進路選択に与えたという影響を見ていくと、例えば災害により保護者の職業が変わったので就職をする際の選択肢が変化したというパターンがありました。また、災害により家族が亡くなったので、就職するときの居住地の選択が変化したというパターンもありました。それから、災害により家族が亡くなったので就職時の職業の選択が変わったというパターンもありました。それから被災経験から将来の目標を見出したというケースもありました。災害が子どもたちの進路選択に影響を与えていないなんて事例もありました。それは例えば、北海道南西沖地震というのは地域的に大きなダメージをもたらした災害でしたけれども、個人個人のケースで見えていくと、災害による自宅のダメージとか家族のダメージというのはそれほど重くなくて、自分自身とか家族にとって災害よりもっと大きな出来事があった場合、そちらに影響されるという場合もありました。必ずしも災害があると、みんなが人生に大きな影響を受ける訳ではないということも、私自身気づかされました。少しこの4つのパターンについて事例を見ていきます。

これはHさんの場合ですけれども、災害以前から経営していたお母さんの売店が津波で流されてしまいました。それで、お母さんは昔からの夢を叶えようと思い民宿を開きました。そうしたら復興特需の時期で工事関係者も多かったのでけっこう流行ったそうです。Hさんは親が経済的に安定したということもあって4年制の大学に進学させてもらったそうです。漁師のお父さんが魚をとってきてお母さんが料理をしてそれを出す、ごはんもおいしいということで、リピーターもいます。インターネットが島の中でも早めに使える宿として売り出していたので、若い人たちにも人気があったりして、割と安定経営をしているところです。災害前には出稼ぎに行っていたお父さんも、その必要がなくなったと。お母さんは「1年中家族と一緒に過ごせるようになった」というふうに言っていました。このHさんは大学卒業後島に戻り、今は実家の手伝いをしています。夏はお客さんの送迎をして、冬は修行を積みに出かける、そういう歩みをしています。このケースは親の職業、というか経営している



仕事が変わったので跡を継ぐという選択肢が発生したパターンでした。

次に、災害により家族が亡くなったため就職する際の居住地選択が変化したというパターンです。この方は女性ですが、災害により家族数名が亡くなっています。Eさん自身は高校を卒業して専門学校に行き、専門職の資格を得たんですが、自分自身が卒業するときに、島に残っていた妹が島の外に進学したいという話になって、そうすると島で働いているお母さん一人が島に残るということになりました。そんな時、ちょうど島で臨時職員の募集があって、このEさんは島に戻りました。そうして今も島で働いていらっしゃるという方がいます。これは、災害で家族構成が変わったことでお母さんはひとりにできないという思いから島に戻ったというパターンです。この方は自分の就きたい職業よりも家族と住むということを優先させたというパターンです。だからといって、悲壮感があるというわけではなくて、当時お話をした時にはお母さん自身が失った家族についてずっと悔やんでいる、それが気がかりだったというふうにおっしゃっていました。なので、悲壮な決意で島に戻ったというよりも、少なくとも私が感じる限りは前向きな選択として島に戻ったという言い方をしています。

それから災害により保護者が亡くなったので就職時の職業の選択に変化が出たというパターンがありました。この方はほんやりと自分は親の跡を継ぐんだらうなというのがあったそうなんですけれども、災害によってその選択肢がなくなりました。今はサラリーマンをしています。

それから、被災経験から将来の目標を見出したというパターンもありました。これは阪神・淡路大震災とかでも耳にすることがあります。私の知っている限り奥尻島では、医療系、看護師さんとかになった方と、消防士になったという方がいます。この女性の実家は民宿旅館を経営しています。災害の直後、この民宿旅館は高台にあって建物が無事だったということもあって、近隣の怪我をした人達が建物の広間に運ばれてきて大人たちが怪我の手当をしていた。その時、10年前におっしゃっていたのは、自分が子どもでそういう何もできないというのが気にかかっていた。その経験がきっかけで看護師を目指して、看護師と保健師の資格を取りました。この方は非常に初志貫徹だなというふうに私自身は思っていて、当時の作文を見ると、もうすでに「看護師になって人の命を助けたい」とか、「困っている人を助けたい」ということを書いていらっしゃいました。私がインタビューを最初にした10年前は大学4年生で、国家試験の準備をしていました。「自分はこういう看護師になりたい」という夢を語ってくれました。先日もこの講演にあたって話を聞いたんですけれども、その当時語っていた歩みを実際に歩んでいらっしゃいました。10年前、将来地域医療に携わりたいと思っているので、そのためにはいろんな分野を経験したいという話を聞いていました。先日、看護師になってからの歩みをうかがうと、いろんな診療科目を経験して、今は地域医療、訪問看護に関心があり、これからは保健師として経験を積みたいという話をしていました。

この方は明確に災害の経験、大人がけが人の手当をしているのを見て看護師を目指したわけですが、進路選択をとっても明確にされているなと思いました。皆さんにとっても励みになる事例になるかなと思ひまして、こちらで紹介させていただきました。

これは、次は私自身の事例です。ほかの人を紹介して自分自身のことをあまり話さないというのも失礼かと思ひますのでちょっと詳しくにお話します。

奥尻中学校2年生の時に北海道南西沖地震にあいました。津波について知らなかったもので、地震の揺れの時はただただ自分の身を守ることで精一杯でしたし、津波から逃げるという発想は私自身には全くありませんでした。私の両親もそうで、近所の人呼びかけで高台に避難しました。翌日家に帰ってみると自宅は無事だったんですけれども、数軒となりまで浸水していました。高台に逃げて一晩過ごして、最初に夜が明けて大人たちが自分の家に帰っていき、「海の様子が落ち着いているようだ」と言ひ、自分の家に帰ったんですけれども、家はちょっと傾いているけど、ちゃんと残っている。津波というのもどうやら来ていないようだ。海の方に歩いていくと、泥が積もっていたりとか友達の家がなかったりとか、という状況が広がっていました。災害の4日後から1ヶ月間は親戚の家で疎開生活をしました。おそらくこちらで過ごされた方もそうだと思うのですが、災害の直後というのは情報が全然なくて、カーラジオくらいしか聞けるものはありませんでした。そうすると島の中でどうなっているかという情報がラジオで聞くしかなくて、隣の地区のことでも全然わからない、そういう状態でした。

災害の翌朝、私と弟が車で待っている時に、弟の小学校の担任の先生が自転車で駆けつけてくれました。子どもたちの様子を見に来たと言ひ、「どこどこは道路が通じてないんだよ」なんて話をしてくれて、それで隣の地区の状態を知るという状況でした。でも、私自身、あまりにも状況がわかっていませんでした。奥尻島の災害が相対的に見てどれだけひどいのか分かっていなくて、奥尻ってものすごく大変なことになっているというのを自覚したのは、テレビを見たときでした。数日後に電気が復旧して朝テレビをつけたら「ズームイン朝」がやっていて、キャスターの福留さんが奥尻島の鍋釣岩という有名な岩の前で中継をしていて、「こんな全国テレビの、こんな人がわざわざ来るくらい、奥尻ってそんなに大変なの？」というふうに、初めて自覚した、そういう状況でした。

災害の4日後からフェリーが復旧したので、夏休みは島外の親戚の家で過ごしたんですけれども、むしろ外にいたほうが、テレビのニュースで島の様子を知ることができました。

この災害で私が直後に感じたのが「当たり前が続くと思ひていた明日というのは来ない」ということもあるんだってということでした。家も、いろんなものも残っていましたが、私にとって、この災害があったのが7月12日で、翌日7月13日ってというのは、吹奏楽コンクールに向けての朝練が始まる日だったんです。だから明日は早起しなきゃという日でした。で、あと、期末試験が終わって一番自信のないテストの科目が返ってくる日で、「ああ返っ

てこないといいなあ」と思っている日でした。でも、例えば「運動会が嫌だなあ」とか「テスト返ってこないといいなあ」と思っても、本当にそう思っていないですよ。いざそうになると、そんなことを願った自分を恥じるどころではない、そういう状態でした。テスト返ってこないといいなあ、なんて言わなきゃよかった、みたいな、そういう後悔もあり、また、思い描いていた明日であっても、悪い明日であってもそれが来ないっていうのはなんて恐ろしいことだろうというふうに思いました。

また、被害がなかったということが後ろめたかったです。隣の家は津波は来ませんでしたけれども地盤が弱くて全壊になりました。そして、建て替えになりました。友達でも家が壊れた子もいました。家族や親戚を失った人がいる中で、被害がないということの後ろめたさはずっとありました。ですから、自分が被災者だっていう言い方はしませんでした。ちょっと余談かもしれませんが、これは阪神・淡路を経験した人たちと話をしても同じことを言っていました。神戸で奥尻での経験をお話する機会を頂いたんですけども、自分がそんなに被災していなくて被災者とは言えない、被害がないことが後ろめたい思いはあるんだけど、でもこの神戸のために何かしたいんだ、とお話されている年の近い人が多かったことが印象に残っています。

また、話を戻しますが、奥尻の人たちは北海道の本土、対岸のことを「向かい」と言います。島から災害4日後に島から出て、対岸に渡った時の温度差に驚きました。当たり前町があって、電気もガスもあって電車も通っていて道もきれいにして当たり前生活ということに驚きました。4日後に家族と一緒にまず札幌の親戚の家に行きました。自分が持っていたバッグに「奥尻町 定池祐季」って名前を書いていました。地下鉄に乗っている時に、見知らぬおじさんに突然話しかけられて、「奥尻から来たの？」って言われて、「はい」って言ったら、「大変だったね。頑張ってるね。」と言われて、見ず知らずのおじさんに言われるほど私たちが大変な経験をしたの？と、またそこでも気づかされるっていうか、そういうふう

外の人が見ていることにまた驚きました。

また、災害の翌年の4月に旭川の中学校に転校したんですけども、はっきり言っただけでなく、なじみませんでした。被災していても、緊迫感であったりとか、復旧・復興に向かって行く街の空気の中で過ごしていたのに、そこから自分は漏れてしまったっていう思い



もありましたし、当たり前の毎日があって都会である旭川の生活に違和感がありました。全校生徒 123 人の中学校から一学年 280 人の学校に転校したのでまず人が多い。浦島太郎みたいな、文明が違うみたいな感覚もあり、また、そこで私は最初、定池さんではなくて奥尻さんと言われました。奥尻から来た人っていうので奥尻さんと言われて、奥尻のことを心配しているんじゃないかと、子ども独特の残酷さを持って話されました。それで本当になじめなくて、正直、その頃のことを思い出すことはないですし、当時の人に会っても私は全然覚えていませんでした。先日、後輩の女の子に話しかけられたんですけども、まったく記憶がなくて、多分私はこの時期辛かったんだなっていうふうに思いました。

南西沖地震の1年半後に阪神・淡路大震災があって、この災害を見た時に大きな災害が起こってしまったという悲しみがあつたんですけども、これで奥尻のことを忘れられちゃうのかなっていう漠然とした不安も同時にありました。阪神・淡路大震災の被災地に関するニュースを見ながらも、奥尻のことを考える日々でした。「阪神・淡路大震災の被災地でこういうことが起こっています」とか、こころのケアがっていったときに、奥尻の子どもたちこういうケアを受けたんだろうとか、こういう対処がされたんだろうか、と阪神・淡路のニュースを見ながら奥尻のことを考える、そういう日々を暮らしていました。それは自分自身が奥尻にいなかったのもあつたと思うんですが、自分なりにあの災害が何だったのか知りたいうということもあつて、大学進学をした後に災害研究の道に進みました。大学に進むときには、どちらかという心身のケアに関心があつて、それで、大学に行ったら心理学をやろうかなという風に思っていたんですけども、もうちょっと違う視点で災害というものを扱うことができるということを知り、今のような研究をするようになりました。

10年前に調査をしたときですけども、災害を経験した子どもたちが、災害の影響だと感じている事柄もありました。災害があつたその時と同じべた風の静かな夜が怖いという言う人もいました。物が流される映像が嫌だつていう人もいました。津波に限らず土石流とかそういう映像を見るのを避けてしまうということでした。あと、地震があつてもすぐに逃げられるような部屋を選ぶつていう方もいました。高層階に住みたくない、自分の力で逃げられるように2階とか3階とか、そういう部屋に住むつていう人がいました。あと、振動そのものに関する敏感さというのもありました。また、どこかで地震があつたり、自分自身で地震を感じたりすると、とつさに奥尻大丈夫かなつていうふうに考えてしまうつていう人もいました。また、奥尻島で南西沖地震の直前にネズミが大量発生するつていうことがあつたんですけども、島の中でネズミがいっぱい発生すると、また地震が来るんじゃないかつていう不安になつて役場に通報があつたりつていうことも起こつています。実はこのネズミに関しては、いろいろ調べてみると島では周期的にネズミが大発生してつていたそうなんです。たまたま地震の年とネズミの発生周期がぶつかつてつてしまったので、ネズミが発生すると地震が起きつていう風に、出来事が結びつてつてしまったようだつたんです。それで騒ぎになるつていうことが起き

たのですが、災害を思い出させるものに対する敏感さというのが、10年経った時点でも残っているんだなと思いました。ただ、夜も眠れないとか不安でどうしようもないというよりは、何となく嫌だとか人よりも敏感だっていう程度で、少なくとも私の聞いた範囲では、特別な治療が必要だというような話はありませんでした。

また、私自身のいわゆる、後遺症的な自覚があります。地震の震動にはやっぱり他の人よりは敏感だなって思います。3.11の後は地震酔いしているようなこともありました。あと、高層階も苦手です。地震が怖いし逃げられないという不安があります。何とか乗り越えられないものかなと思って、今はあえて高い建物に住んでいるんですけども、やっぱり地震で揺れて落ち着かないので、次引っ越すときは低層階にしようと心に誓っています。それから、私自身は地震のあとに海に入っていません。いつかは入るかもしれませんが、ちょっとまだ、入るタイミングがないという感じです。北海道南西沖地震の時に家具が倒れて大変だったというのもあって、今でも背の高い家具は苦手です。自宅では背の低い家具を置いていて、その方がやっぱり気持ちが落ち着きます。

3. 災害と学校教育

3番目の災害と学校教育について話をします。まず前提として、心のケアという観点は当時ほとんどありませんでした。自分自身、いち中学生の印象として、すごくありがたかったんだけど、救援物資とかマスコミとかアンケートとかという非日常に翻弄されていたなって振り返る部分もあります。先生方も被災したり不安な中で仕事していたんだろうなと

いうことも、大人になって見えてきた部分もあります。ある小学校の当時の校長先生にお話をうかがいました。その小学校は、津波で校舎が使えなくなってしまいました。当時児童は10名いて、災害の翌年に開校100周年を祝う式典を控えていました。建物が壊れてしまい、他の小学校に間借りしていました。スクールバスで子ども達は通っていました。子どもたちの家は基本的に浸水したけれども残ったという子が多かったんですが、学校の先生の家は流失してしまいました。一人保護者を亡くしたという子がいましたが、被害は横並びだったので、逆に、その、被害のランク付けということが少なく良かったという言い方をされていました。

この校長先生がおっしゃっていたのは、学校



として本来の学校の教育目標、こういう子どもになってもらうことを目指すということを実現するための、もともとの教育活動に戻すことを目指したとおっしゃっていました。例えば、この小学校では伝統的にやってきた俳句作りを再開したりとか、学校として伝統としてやってきた運動をずっと続ける、そういうことをしたそうです。いろんな支援の話を頂いたそうなんですけれども、いただく支援によって、子どもたちの発達段階において自立に向かっていったりとか、そういう段階であるのに、何かをしてもらうということを当たり前にしてしまうと、子どもたちが本来身に付けるべき資質であったりとか、そういうものが阻害されるんじゃないかということ懸念して、過度な支援はお断りしたと聞いています。例えば、ありがたい支援であっても、何か頂くたびに子どもたちがお礼状を書いていた。そうすると授業時間が削られてしまう。それで校長先生は何か頂いた時にまず、児童みんなで集まって、いただいた物の前で写真を撮って、お礼状を校長先生が書くという形に徐々に切り替えていったとおっしゃっていました。でもそれでも校長先生の業務というものは増えてしまうので、なかなか学校の本来の業務やご自身の家庭、こういうイレギュラーなこととのバランスが難しかったという話をしていました。

特別な子どもに対する特別な支援ではなくて、特別な経験をした子どもであったとしても、子ども達が本来受けるべき教育環境に戻すために必要な支援が欲しかったということもおっしゃっていました。特に嬉しかったのが、リクエストを聞いてくれて、行事に使う幕をくれたことが非常にありがたかったとおっしゃっていました。普段良く使うものだけでも揃えるにもお金がかかるし、ボールとかよりも実はこういうものが必要だったとおっしゃっていました。あと、ワークとかドリルとかが欲しかったけれども、実はそういうものはあまりいただく機会がなかったということもおっしゃっていました。

奥尻島では非常に多くの救援物資をいただきました。私もいただきました。ありがたく使わせていただきました。ですが、奥尻町には救援物資がまだ残っています。この小学校のプレハブの校舎にもまだ残っています。それはやはり使い切れなかったものであり、それを別の機会にお出ししたりもしているそうなんですけれども、やっぱり支援のコントロールというものが当時は全く観点が無かったということの反省でもあります。

また、「津波は3度来た」というふうにこの校長先生はおっしゃっていました。地震のあとの本物の津波、そして、言い方はちょっと誤解を招くかもしれませんが、過剰な支援と、それに対応する一連の事柄ですね。そして押し寄せるマスコミ。この3つが津波だ、この先生にとっての津波だとおっしゃっていました。マスコミは取り上げてもらうことで支援を頂いたり、島の現状を知っていただくというところではありがたかったけれども、ずっとずっと「密着取材だ」と言ってカメラを向けられていると、それは子どもたちにとっての非日常がいつまでも続くことなので、それもいかなものかということとそれで非常に悩んだということをおっしゃっていました。

中学生の当時の私の話をちょっとします。生徒は全員無事でした。私の通っていた中学校では123名の生徒は全員無事で、保護者を亡くした生徒は1名いました。ただし、自宅を流してしまったという子もいましたし、中学校自体でも数日間ですが地域の方が避難生活を送っていました。また、体育館は夏休みの間救援物資仕分け会場になっていました。これはある意味良かった部分もあって、当時の中学校の文集を見ても、学校の先生方が仕分け作業をしていたんですけれども、割と元気だった生徒たちに声をかけて、夏休みに近くに住んでいる生徒たちが仕分けの手伝いをしてボランティア活動をしたと書いている子もいて、それは、頂いた支援を体感する経験として良かったと言っている人もいました。

8月下旬に学校が再開しました。校舎自体も無事でした。基本的に無事でした。被害は少なかったのでマスコミの取材はそんなに来ませんでした。すごく覚えているのが、救援物資のうち賞味期限の近い飲み物というのがあって、頻繁に配られました。当時は中学校で飲み物を飲んではいけませんっていう時代で、水飲み場の水は飲んでよくても、自動販売機はないですし、飲み物を持ってきちゃダメだったのに、大人が飲み物を配って「飲め」っていうのはすごく不思議な感じがしました。しかもその飲み物は、救援物資でしか見たことのない、とても不思議な味の飲み物で、後で大人になって調べたらとっくに廃盤になっていました。それもまた非日常だと思うんですけれども、当時の一生徒の視点から見ると、海産物が食べられなくなったっていう話は、奥尻でもありましたが、徐々に改善されていました。魚が食べられない人がいるとか、特にタコがだめだとかだったんですけど、私も魚食べたくないなって、上手く言えないけど生理的にありました。でも、他の人から同じことを聞いた時に、「食べられなくてもおかしい事じゃないんだな」と安心する部分と、そのくらいショックを受けていないといけないのかなっていうような2つの交錯する思いがありました。私自身はちょっと食べられない時期もあったんですが、気付いたら食べていました。同じような話はけっこう聞きました。

あと私のいた学年は、反抗期で大変な、ちょっと元気すぎる学年でした。学年としては比較的被害の少なかった生徒が多かったのですが、大変なときに反抗している場合じゃないなっていう、そういう空気感があって、合唱を頑張るようになったりとか、クラスがまとまるっていういい経験がありました。それは、10年後に同窓会をしたときに、「お前いつつも歌わなかったのにあの時は歌ったよな」みたいな、そういういい思い出として語られる、そういうことがありました。また、余震ごっこみたいなものもありました。私も含めて余震に怯える子とかがいたんですが、そういうときにクラスのムードメーカーの男の子が「机の下に隠れろー！」ってわざと明るく言って、みんなで隠れるみたいな、それが「余震ごっこ」みたいな形式としてあったんですね。それで空元気に笑い飛ばすみたいなクラスの雰囲気もありました。

あと、当時の奥尻で子どもたちが遊んだり何かするっていうと、部活をするか、海で遊ぶ

か、自転車で17km離れている青苗地区まで行くか、魚を捕りに川に行くかみたいな、自然体験をするか家でゲームするかみたいな過ごし方でした。災害の後は、少なくとも海で遊ぶという選択肢はなくなりました。素行不良なところもある学年・学校ではありましたが、学校祭の準備とか合唱とか部活みたいな、みんなで打ち込めるものがあるのは、自分たちで発散してるなっていう実感がありました。特に合唱は、みんなで作り上げてやり遂げたっていう感覚があるのは自分にとってはよかったですし、後からもいい思い出として語られる、そういうものでした。

私の中で印象的だったできごとがあります。私の学年は、合唱なんて男の子たちは歌わないっていうようなクラスでした。学校祭のときに合唱コンクールがあって、各学年2クラス、全学年6クラスでコンテストをします。だいたい3年生が一番上手いので3年生のクラスのうちどちらかが優勝するんですけども、その年は先生が粋な計らいをしてくれて、3年生のクラスと私たちのクラスが優勝っていうふうにしてくれました。実はその時の賞状今でも私の実家にあるんですけども、そういう風に、まず自分たちより上手くて当然の3年生に肩を並べたっていうのと、バラバラだったクラスがまとまって大人にほめてもらったっていうのは、すごくいい思い出になりました。先生方も色々な不安があったと思うんですけど、結構ドーンと構えてくれている先生が多かったんで、安心してぶつかることができましたし、逆にそれを見て「大変なときに反抗しちゃいけないかな」っていう、そういう空気を持つことができました。

防災教育の話はもともと補足のつもりだったので飛ばします。

4. おわりに

最後に、資料で6番と書いてしまっていた5番に触れて終わります。

被災経験は、これは私自身の個人的な思い出ですけども、地震とか津波の恐怖だけではないなって思っています。災害の発生から、それこそ地震が起こったその瞬間から、復興期に至るまでの、さまざまな経験を指してると思います。悲しい思い出だけではなく、よい思い出もあります。先ほど言った合唱の思い出も、辛い時期の楽しい思い出だったりします。そういう一連の経験は常に思い出されるわけではなくて、時間の経過とともに自分自身の人生の中になんとか染み込んでいって、あるときは進路選択をするときに効いてくることもある、あるときにはそれ以外のほかの経験が効いてくる、そういうこともあるんだなっていうのを自分自身の20年であったりとか、ほかの方のインタビューを通して自分自身が今感じていることです。


あと、一時的な赤ちゃん返りなどはよく聞きますが、そういうものがあっても、そこばかり注目して変に心配しないでほしいと思います。自分の身の回りの経験からですけども、大抵はいずれ収まります。夜、子どもがひとりで眠れないとか、そういうのがあっても、

どちらかという大人がドーンと構えていてくれると安心して子どもたちはぶつかることができ、落ち着いていくのを助けてくれるのかなと。あと、先ほどの合唱のように、子どもが打ち込めるものがあると、前向きに発散できて、辛いときのいい思い出として残りやすいのかなと思います。

私の話は以上で終わります。

災害を経験した子どもたち
—北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に—

北海道大学大学院理学研究院
附属地震火山研究観測センター 助教
人と防災未来センター リサーチフェロー
定池祐季



1.奥尻町と北海道南西沖地震の概要

北海道奥尻町



- 人口3,033人
(2013年1月末現在)
- 主な産業は、漁業と観光業。
- 親族に志向したコミュニティ


日本海中部地震



- 1983年5月26日正午頃発生
- マグニチュード7.7
- 最大震度5 (奥尻震度4程度)
- 死者・行方不明者104名
- 奥尻町青苗地区では、約20分後に第1波が襲来、30-40分後に第2波が襲来。
- 津波の高さは3-5m
- 青苗地区では2名が犠牲に
- 青苗の岬地区西側では4.5mの防潮堤の新設
- 東側の既存防潮堤も4.5mにかさ上げ
- 漁港背後低地部から高台への避難路整備
- 学校教育で地震避難訓練が始まる
- **地震=津波という知識が根付くきっかけになった**

『昭和58年(1983年)日本海中部地震災害の記録』(青森県 1984年)

北海道南西沖地震



発生日時：
1993年7月12日22時17分
マグニチュード：7.8
最大震度：5 (寿都、江差など)
※奥尻島の推定震度は6

死者・行方不明者：230名
(うち奥尻町：198名)
重軽傷者：323名
(うち奥尻町：143名)
奥尻町の被害総額：約664億円

津波、火災、斜面崩落、液状化現象などが発生

気象庁資料より

1993年7月12日はどんな日だったのか

- べた風の静かな夜
- イカ漁で出漁している男性達がいた
→女性や子供だけで留守番をしている世帯があった
- 翌朝のアワビ漁に備えて、早く休む漁業者がいた
→就寝中に地震に遭った人たちがいた



奥尻町の復旧・復興過程①

年月日	行政による事柄	その他の事柄
1993年7月12日	22：17北海道南西沖地震発生	
13日	救援・救助活動	
16日	仮設住宅のニーズ把握開始 奥尻町災害住宅復興資金貸付受付開始	フェリー再開 水道全島の2/3再開、電気復旧
17日		航空機再開
18日	第1次仮設住宅建設開始(100戸)	
20日	義援金の第一部配分 北海道都市整備課・奥尻町長・奥尻町企画課長：「区画整理の方針」を協議	
21日	道住宅都市部長視察(潮棚、北槍山、大成、江差、奥尻)(7/21～22) 北海道都市整備課：建設省区画整理課へ、「区画整理の方針決定」を連絡する 北海道立寒地住宅都市研究所：青苗地区の整備方針の検討を始める(事業手法の検討は、8月半ばから)	
22日	奥尻町：第1次仮設住宅入居説明会、選考会	
23日	北海道：「復興区画整理(建設省)」の方針を決定	
24日	奥尻町：奥尻町被災者の住宅対策のため住民アンケート調査実施(27日回収)	

奥尻町の復旧・復興過程②

年月日	行政による事柄	その他の事柄
1993年7月25日	奥尻町：第2次仮設住宅建設開始(100戸)	電話全面復旧
27日	仮設住宅完成	
28日	仮設住宅の入居開始	
30日	北海道「奥尻災害復興支援プロジェクトチーム」設置	
8月6日	義援金配分	
9日	北海道「南西沖地震災害復興対策推進委員会」を設置	
20日	北海道庁企画振興部に「南西沖地震災害復興対策室」を設置	
28日	島内の避難所すべて閉鎖	
29日	奥尻町が行方不明者の捜索打ち切り	
30日	大学や国立研究機関の専門家による「北海道南西沖地震津波検討委員会」を設置	
9月1日	道の災害弔慰金第1期2,500万円を5町に配分	
11日	合同慰霊祭(奥尻町)	
24日	「南西沖地震災害復興対策推進委員会」内「まちづくり対策プロジェクトチーム」により、青苗地区の①案：全戸高台移転、②案：一部高台移転(低地に90戸の漁師町)が示される	

奥尻町の復旧・復興過程③

年月日	行政による事柄	その他の事柄
10月1日	役場内に災害復興対策室設置	
9日	「奥尻の復興を考える会」結成	
19日	青苗地区で集落移転に関する全体説明会	
28日	住区別の懇談会を開催	
11月8-12日	「奥尻の復興を考える会」アンケート実施	
22日	「奥尻の復興を考える会」アンケート結果に基づき、一部高台移転案を決議 一部高台移転案が町議会で了承	
12月3日	奥尻町から北海道へ復興方針について回答	
19日	北海道が復興計画素案を策定し、奥尻町へ示す	
20日	町議会で上記素案を基本として復興計画を進めることを了承	
1994年2月	奥尻島全島にわたる防潮堤の整備事業計画が決定	
1996年3月	土盛工事、防潮堤工事、下水道工事終了	
3月27日	奥尻町：奥尻町防災会議にて、奥尻町地域防災計画大幅改訂(昭和58年以來)	
12月	住宅新築ほぼ終了、仮設住宅なくなる	
1998年3月17日	「完全復興宣言」	

被災3ヶ月後の青苗地区



1993年10月9日撮影 定池家所蔵

災害から10年後の青苗地区



2003年10月 定池撮影

防潮堤



青苗地区

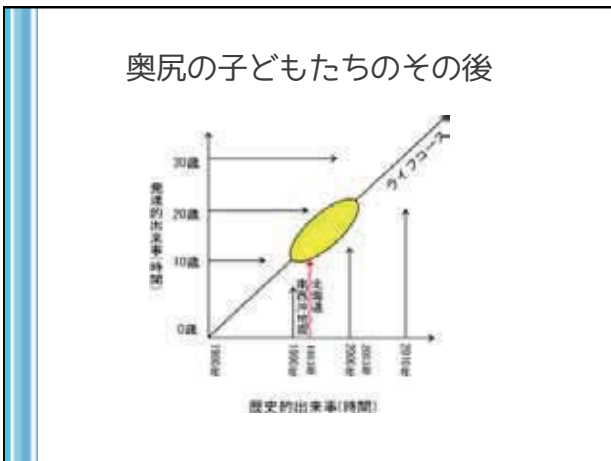


人工地盤





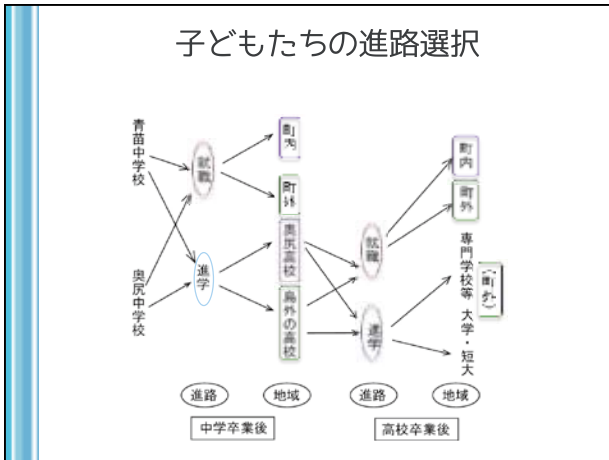
2. 災害を経験した子どもたち



奥尻町の学校教育

- ・ 2012年現在、小学校が3校、中学校が2校、高校が1校。
(2005年3月末で稲穂小学校が宮津小学校に統合)

稲穂小学校
宮津小学校
奥尻小学校
奥尻中学校
青島小学校
青島中学校



中学卒業後の進路選択

- ・ 大半の生徒は奥尻高校に進学
- ・ 将来的に島内に就職しようと考えている生徒は奥尻高校に進学する傾向にあった
- ・ 島外の高校の主な進学先は、函館市や札幌市、およびその近郊
- ・ 自衛隊員の子どもは、親の転勤を見越した進路選択を行う傾向がみられる。

奥尻高校卒業後の進路選択

- ・ 1994年度以降は進学する生徒が増加した。
- ・ 進学先は従来は専門学校が多かったが、近年は指定校推薦枠の拡大もあり、大学に進学する生徒が増えてきている。(2002年時点)

災害後の進路選択の状況（～2002年）

- ・ 基本的に、子どもが望む進路を親がかなえてあげていた。
- ・ 災害の影響よりも、生徒自身の元々の学力が進路に影響していた。
- ・ 高校生の場合は、経済的な事情で進学をあきらめたケースも見られる。

災害が子どもたちの進路選択に与えた主な影響

- (1) 災害により保護者の職業が変わったため、就職をする際の選択肢が変化した。
- (2) 災害により家族が亡くなったため、就職時の居住地選択が変化した。
- (3) 災害により家族が亡くなったため、就職時の職業の選択肢が変化した
- (4) 被災経験から将来の目標を見出した。

(1) 災害により親の職業が変わったため、就職をする際の選択肢が変化した

Hさん：災害以前は売店を経営していた母が、災害後に民宿を開業。収入が安定し、大学に進学することができ、就職の際に家業を継ぐという選択肢が生じる。大学卒業後は島に戻り、家の手伝いを始める。

(2) 災害により家族が亡くなったため、就職をする際の居住地選択が変化した

Eさん：災害により家族が亡くなり、きょうだいも離島すると母が一人で島に残るという状況が発生するため、専門学校卒業後、奥尻で就職。現在も島で働いている。

(3) 災害により保護者が亡くなったため、就職時の職業選択に変化が出る

Fさん：「地震がなかったら漁師になっていたかもしれない」
→父親が亡くなっており、父の後を継ぐという選択肢が消失した

(4) 被災経験から将来の目標を見出した①

Aさん：当時小学校6年生。
・ 両親は民宿旅館を経営。
・ 災害直後、怪我をした人たちが広間に運ばれてくる。
・ その経験がきっかけで看護師をめざす。
・ 看護師試験に無事合格。
・ 地域医療、訪問看護に関心。

(4) 被災経験から将来の目標を見出した②-1

- ・ 奥尻中学校2年生の時に北海道南西沖地震を経験
- ・ 「津波」を知らなかったため、自分ひとりでは何もできなかった
- ・ 近所の人の呼びかけで避難をした。
- ・ 自宅は無事だったが、数軒隣まで浸水していた。
- ・ 災害4日後から約1ヶ月間、親戚の家で「疎開」生活。
- ・ 中学3年生になる前に転校をした（父の転勤）。

(4) 被災経験から将来の目標を見出した②-2

- ・ 当たり前が続くと思っていた「明日」が来ないこともあると知り、むなしくなった。
 - ・ 「被害がなかったこと」が後ろめたかった。
 - ・ 「向かい」に渡ったときの温度差に驚いた。
 - ・ 転校先になじめなかった。
 - ・ 1年半後に阪神・淡路大震災
- 大きな災害が起こったことの悲しみと「忘れられていくこと」への漠然とした不安
- ・ 阪神・淡路大震災の被災地に関するニュースを見ながら、奥尻のことを考える日々。
 - ・ 「自分なりに、『あの災害』が何だったのか知りたい」
- 大学進学後、災害研究へ

災害を経験した子どもたちが、災害の影響だと感じていることから（2003年時点）

1. 「べた凧の静かな夜が怖い」
2. 物が流される映像が嫌だ
3. すぐに逃げられるような部屋選び（低層階など）
4. 振動に対する敏感さ
5. 地震を感じると、「奥尻は大丈夫か」（島外居住者）
6. 奥尻でネズミが大発生→「地震の前触れでは？」
→災害を思い出させる物に対する敏感さ

講演者自身の「後遺症」の自覚

- ・ 地震や振動にやや敏感
- 3.11後は、時々地震酔いのような感覚も。
- ・ 高層階が苦手
- 地震が怖い、逃げられないという不安
(ただし、現在は高層階に居住)
- ・ 海に入れない
 - ・ 背の高い家具が苦手
(災害の時に、家具がばたばた倒れた)

「被災者」として見られること

- ・ 「奥尻出身です」「奥尻に住んでいました」→「地震のときどうだったの？」
- ・ 悲惨な経験→マスコミによる取材過多→マスコミに対する不信
- ・ 面接で災害経験を話題に
- ・ 災害の話題で友達を作る
- ・ 「被災者だと思っていない」

被災した当時の子どもへのインタビューと、 自分自身を振り返って

- ・ 「被災経験」とは、地震や津波の体験やその恐怖だけではない
- ・ 災害発生から復興期に至るまでの、様々な経験を指している
- ・ 悲しい思い出ばかりでなく、良い思い出もある
- ・ それらの経験がいつも想起されるわけではなく、時間の経過と共に自分自身の人生の中にしみこんでいき、ある時には何らかの影響をもたらし、ある時には他の経験がきいてくる

3. 災害と学校教育

前提として

- ・ 「心のケア」という観点はほとんどなかった。
- ・ いち生徒の印象として、ありがたい反面、救援物資、マスコミやアンケートという「非日常」に翻弄されていた。
- ・ 先生方も被災したり、不安な中で仕事にあたっていた

ある小学校の場合 (小学校の校長先生のお話から)

- ・ 当時の児童数は10名
- ・ 平成6年(災害の翌年)に開校100周年を控えていた
- ・ 津波により、小学校は全壊。間借りを余儀なくされる。
- ・ 教員住宅は流失
- ・ 被害の程度は、ほぼ同じ
(1名、保護者を亡くした児童がいた)

校長先生の話から

- ・ 学校として、本来の学校の教育目標を実現するため、元の教育活動に戻すことを目指した
(長く続けてきた、俳句づくりを継続するなど)
- ・ 支援によって、「何かしてもらおう」ということが当たり前になってしまうと、児童の成長の妨げになると考え、お断りすることもあった。
- ・ 多くの支援はありがたかったが、お礼などで授業時間が削られないような配慮が必要だった
- ・ 特別な支援ではなく、普通の教育環境に戻すために必要な支援がほしかった
(学習教材、校旗など)
- ・ 「津波」は3度きた。地震の後の津波、過剰な支援、押し寄せるマスコミ

ある中学校の事例（定池の記憶による）

- ・ 生徒は全員無事
- ・ 保護者を亡くした生徒が1名
- ・ 自宅を流失した生徒がいた
- ・ 地域の住民が避難生活を送る
- ・ 救援物資置き場・仕分け会場となる
(夏休みに近隣の生徒が仕分けの手伝いをした)
- ・ 8月下旬に学校再開
- ・ 被害が少なかったため、マスコミ取材は少ない印象
- ・ 救援物資のうち、賞味期限の近い飲み物が頻繁に配付された(学校で飲み物を飲んでいい、というのが非日常的な感じがした)

当時の生徒の視点から

- ・ 海産物を食べられなくなった人もいたが、徐々に改善されていった
(「魚が食べられない人がいる」、という話が出たときに「食べられなくてもおかしいことじゃないんだ」という意味と、「そのくらいショックを受けていないといけないんだ」という2つの思いがあった)
- ・ 元気づいた学年がおとなしくなった。比較的被害が少なかったこともあり、「大変なときに反抗している場合じゃない」ということがわかっていたように思う。
- ・ 余震を笑い飛ばすような、空元気なところもあった
- ・ 学校祭の準備や合唱のように、みんなで何かをする、打ち込めるものがあるということが、行き場のないエネルギーの発散につながっている気がした。
- ・ 大人たちがどんと構えてくれると、安心してぶつかることができた。

4. (補足) 奥尻町における防災教育

学校教育における防災教育の現状①

- ・ 平成8-9年度にかけて防災教育推進委員会を設置し、とりまとめの冊子を作成(しかし、その後使用実態はなし)
- ・ 新任教員向けの、津波館見学会を実施



防災教育推進委員会による資料集



津波館

奥尻島津波館

〈施設概要〉

- ・ 場所：北海道奥尻町青苗地区（旧5区）
- ・ 平成12年10月完成。翌13年5月オープン
- ・ 町営、奥尻町教育委員会の管轄
- ・ 展示品：オブジェ、作文・詩、映像、遺跡出土品、写真パネル（後から設置）



津波館外観（2008年8月撮影）



学校教育における防災教育の現状②

- ・ 地震避難訓練
- ・ 上記訓練と抱き合わせの防災学習
- ・ 「総合的な学習の時間」を利用した、北海道南西沖地震に関する学習（教員の裁量による）



避難訓練



学校教育における防災教育の課題

- ・ 防災教育への取り組みの有無は現場の教員の裁量に任されており、継続した取り組みは、避難訓練のみにとどまっている。
- ・ 被災経験のない教員が防災教育を進める助けとなりうる資料が作成されたものの、現在は活用されておらず、防災教育を実施する教員の負担が増大している。
- ・ 被災後の時間の経過に伴い、被災経験のない教員、児童・生徒、保護者が増加する中、どのように過去の被災経験を継承していくかという方向性が、未だ定まっていない。

補足：地域における災害の伝承—追悼行事



行政



遺族会連合会



地区遺族会



住民有志



5.おわりに

- ・ 「被災経験」とは、地震や津波の恐怖だけではない
- ・ 災害発生から復興期に至るまでの、様々な経験を指している
- ・ 悲しい思い出ばかりでなく、良い思い出もある
- ・ それらの経験がいつも想起されるわけではなく、時間の経過と共に自分自身の人生の中にしみこんでいき、ある時には何らかの影響をもたらし、ある時には他の経験がきいてくる
- ・ 一時的な反応（赤ちゃん返り）などがあっても、そこばかり注目して、変に心配しないでほしい。たいていはいずれ収まる。
- ・ むしろ大人たちがどんと構えてくれると、安心してぶつかることができる。
- ・ 打ち込めるものがあると、前向きに発散でき、辛いときのいい思い出として残りやすいのではないかと。

表 北海道南西沖地震後の奥尻町における追悼と再建にかかわる年表

年	月	日	復旧と復興に関する動向	その他の奥尻町における動向
1993	7	12		午後10時17分,北海道南西沖地震発生
		14	合同通夜が営まれる	
		18	第一次仮設住宅建設開始	
		27	最初の仮設住宅完成	
		30	北海道「奥尻災害復興 支援プロジェクトチーム」設置	
8	8			4:42最大の余震発生(M6.5,奥尻町の震度5)
		9	北海道「南西沖地震災害復興対策推進委員会」を設置	
		20	北海道庁企画振興部に「南西沖地震災害復興対策室」を設置	
		28	島内の避難所すべて閉鎖	
		29	奥尻町が行方不明者の捜索打ち切り	
		30	海上保安庁:青苗漁港における港内捜索を打ち切る	
9	1		道の災害弔慰金第1期2,500万円を5町に配分	
		9	災害復興支援ワーキング・グループ幹事会で、①全戸高台案、②折衷案(旧市街地は漁師町とする)、③旧市街地再生の3案を検討	
		11	合同慰霊祭(奥尻町)	
		24	「南西沖地震災害復興対策推進委員会」内「まちづくり対策プロジェクトチーム」により、青苗地区全戸高台移転案と一部高台移転案の2案が町に示される	
		30	上記2案が町議会に示される	
10	1		役場内に災害復興対策室設置	
		9	「奥尻の復興を考える会」結成	
		19	青苗地区で集落移転に関する全体説明会	
		28	住区別の懇談会を開催	
11	8-12		「奥尻の復興を考える会」アンケート実施	
		22	「奥尻の復興を考える会」アンケート結果に基づき、一部高台移転案を決議 一部高台移転案が町議会で了承	
12	3		奥尻町から北海道へ復興方針について回答	
		19	北海道が復興計画素案を策定し、奥尻町へ示す	
		20	町議会で上記素案を基本として復興計画を進めることを了承	
1994	2		奥尻島全島にわたる防潮堤の整備事業計画が決定	
	3	16		地震で倒壊した青苗岬灯台が再建,点灯
		30		稲穂小学校落成式
	4	13		「7・12青苗地区火災における火災保険を請求する会」会員12人が損害保険会社を相手取り一次提訴
	6		青苗地区の老人クラブが青苗地区に慰霊碑建立	
	22-		賽の河原祭りで南西沖地震犠牲者の追悼	
	23			
	7	10	北海道南西沖地震奥尻島1周年追悼洋上慰霊祭 主催:奥尻町・奥尻島観光協会	
		12	震災1周年黙祷	
	8	2		北海道南西沖地震対策本部(北海道)解散
		12		奥尻島復興記念音楽祭(奥尻町)
	10	10		スタニスラフ・ブーニン氏によるピアノコンサート(稲穂小学校)
	12	10	観音山壁画除幕式(奥尻町)	

年 月 日	復旧と復興に関する動向	その他の奥尻町における動向
1995 3 23	奥尻島復興記念碑除幕式(奥尻港フェリー岸壁)	
3 30		青苗小学校落成式
5 9	浄土真宗大谷派が宗派単独の法要を実施	
6	稲穂地区遺族会設立	
7 12	北海道南西沖地震奥尻島2周年追悼式 奥尻島追悼洋上慰霊祭 主催:奥尻町・奥尻島観光協会	
8 1		ウニ漁再開
9 2	青苗小学校:青苗前浜にて全国からの折り鶴と激励の手紙を燃やし慰霊	
1996 3		
24		大地震被災地同士の縁で兵庫県北淡町と奥尻町が姉妹提携
27	奥尻町:奥尻町防災会議にて、奥尻町地域防災計画大幅改訂(昭和58年以来)	
7 12	北海道南西沖地震奥尻島3周年追悼式(奥尻町)	
10		仮設住宅撤去
11 6		災害後初の全町防災訓練
12	住宅新築ほぼ終了、仮設住宅なくなる	
1997 1 6		青苗診療所が再建し、毎日診療始まる
3		防潮堤がほぼ完成する
6 22	稲穂地区慰霊碑除幕式	賽の河原公園竣工式
22-	賽の河原祭り	奥尻・稲穂の賽の河原まつり協賛行事復活
23		
7 3		全国津波防災サミット開催
10		アワビ漁再開
12	北海道南西沖地震奥尻島4周年追悼式(奥尻町)	
10 12	松江地区慰霊碑除幕式	
12		
12	奥尻地区慰霊碑除幕式	
1998 3 17		町が定例議会で「完全復興宣言」
4	青苗地区遺族会発足	
5 28	遺族会連合会発足	
6	稲穂地区に観音像建立	青苗地区の住民がかつての町並みを模型で再現
7 4	青苗の慰霊碑「時空翔」除幕式	
5	北海道南西沖地震奥尻島5周年追悼式(奥尻町)	
8 9		98奥尻復興ハーフマラソン開催
1999 6 12		被災した曹洞宗福田山耕養寺(青苗)落成式
7 12	7回忌法要(遺族会連合会) 町民有志によるろうそくを用いた追悼が始まる	
2000 6 22	賽の河原祭りの法要で青森のイタコが招かれる	
7 12	北海道南西沖地震物故者追悼法要(遺族会連合会)	
11 11		津波館落成式典・祝賀会
2001 7 12	北海道南西沖地震物故者追悼法要(遺族会連合会)	
2002 7 12	北海道南西沖地震物故者追悼法要(遺族会連合会)	

年 月 日	復旧と復興に関する動向	その他の奥尻町における動向
2003 6	青苗地区の住民有志による供養塔作成が始まる(7月完成)	
7 12	奥尻島犠牲者十周年追悼式(奥尻町)	
2004 7 12	北海道南西沖地震物故者追悼法要(遺族会連合会)	
2005 3 17		稲穂小学校閉校式
7 12	13回忌法要(遺族会連合会) 青苗地区遺族会 洋上から灯籠を流す	
10 15		奥尻島初の修学旅行生受け入れ
2006 7 12	地区遺族会による個別法要	
2007 7 12	地区遺族会による個別法要	
2008 7	観音山の壁画撤去が決定	
7 12	15周年追悼式、青苗地区の子ども達が合唱をする	
7 20		奥尻町フットパスがオープン
10 10		ワイン工場が完成
2009 7 12	17回忌法要(遺族会連合会)	
2010 7 12	地区遺族会による個別法要	
2011 3 11		東北地方太平洋沖地震の発生後、奥尻島への問い合わせ、取材、視察が激増。
7 12	地区遺族会による個別法要。マスコミが大挙する。	
2012 4	「津波語りべ隊」発足	
7 12	地区遺族会による個別法要	

北海道新聞社記事、関編(1999)、内閣府資料に加筆

質疑応答

質問 1：「今の仕事・研究について簡単に紹介してください」

確かに自分自身の今の仕事を全くお話ししていなかったなという点に気づきまして、ありがとうございます。今私は大学の理学部にいますが、文学部の出身でして、地震・火山など自然現象を扱っている先生方と一緒に働いていますが、人とか社会と



いう視点での防災とか復興についての研究をしています。もともとは奥尻島の復興研究というところに始まり、奥尻島の復興を研究していると、奥尻島の災害を経験した人たちはいるけれども経験していない子どもたちが増えていって、どうも奥尻島の中で災害の経験が継承されているような様子がみられないというのを長く通っていて感じたので、復興研究と同時に防災教育についても研究を始めました。北海道の有珠山は数十年に1回噴火していて、次の世代につなげる防災教育、肩肘はらずに火山を楽しみながら防災教育をやっているの、そういう例を見せていただきながら、復興と防災というところを両立させようとしています。今は、北海道の中では地域防災をどういうふうに高めていくかという観点で、町内会の方々に自主防災組織をどうやって作っていかうかとか、どんな活動をしていかうかとか、その前の意識啓発のお手伝いをしたりですとか、行政の方の職員研修などをしていく、ということをしています。あと、東北に来るときには奥尻島の話をして欲しいという依頼が多いので、東北に来るときは自分の研究として通うというよりも、奥尻島でお世話になった者の1人として、また災害復興の研究をしている者として、お手伝いというつもりでできる限り自分の持っている情報を要望に合わせて提供するようにしています。また今年奥尻で災害20年なので、島の中でもインタビューをしたりということで、奥尻島の災害の20年間の総括めいたことをできればなということに向けて活動しています。あと理学部的には、研究者の方々の研究成果を発信するというのがメインの仕事なので、そのへんも今取り組んでいるところです。

質問 2：「島の方が島を出るという体験が島と向き合う際にどのように影響したと思うか」

奥尻の子たちっていうのは、私たちの時代は島の生活っていうのはプライバシーがなく、たとえば中学生ぐらいだと〇〇くんが〇〇ちゃんを好きみたいな話が出ると、だいたい全校

生徒の知るところとなるとか、親戚同士とかも非常に濃かったりするので、島の中で隠し事ができない。たとえば悪いことをして、どっかでタバコを吸ったりしても誰かが必ず見えています。みんなが自分を見てくれることの心地よさとその息苦しさとの両面で、だいたい中高生ぐらいになるとそれが息苦しくなる子が多い時期で、そういうのもあって島の外の高校に行きたいとか、島の外に一回出たいっていう気持ちが高まる様子は自分でも見聞きしてました。でもだいたい、島を出るとみんなが知らない人だっていう感覚が逆に怖くなったりとか、人を信じすぎて騙されてしまったりという話も多くて、傷ついて島に帰るっていう人もいます。夢破れて島に帰るとか、自分がかつては息苦しいと思っていた「人の目」ってというのが実は心地よいものだったっていうことに島を出て気づくっていうふうに聞いたりします。また、「島が好きだ」っていう人はやっぱり多くて、やむなく仕事がなく島の外で働いてはいるけれど仕事さえあれば島に戻りたいって話は聞きますし、臨時職員とかで島に戻ってくるっていう人は、チャンスさえあればけっこう多いです。ただ人口が少ないので1人2人っていう数になってしまうんですけど、そういう人たちの話を聞くと、島に対する非常に熱い思いがあります。

質問 3 : 「災害後の高い防潮堤に抵抗感はなかったのか」

昨年の9月に気仙沼で防潮堤の勉強会に招かれたときにもお話したんですが、私自身は抵抗感が非常にあります。ですが、通っていくとそれが当たり前の光景になって慣れちゃうんですよね、良くも悪くも。お話を10年前に聞いた、奥尻島出身の大学生は、「奥尻島は災害復興を間違えた」という言い方をしていました。20年に1回とかしか来ない地震のためにあんな防潮堤作って、海壊して川せき止めて、観光が主な産業なのに海も見えないし、磯焼けも起こってるし。その子は、災害の前は家の2階の窓から釣糸を垂らして魚釣りができる子だったらしいんですね。でも防潮堤ができたならそんなこともできなくなり、そういう海の怖さもあるけれども海のすぐ近くに住んでる心地よさを失うっていうことは一体何だったんだらうっていうことを語っていました。ただ「抵抗感があるかないか」っていうのは島の外の人々が今感じるんですけども、島に長く住んでると先ほど申し上げたように当たり前になっちゃうので、もし防潮堤を作るかどうかってことの議論と絡めて質問されたのであれば、作らなくていいものであれば作らないっていうふうにしないと、防潮堤ができるとそれがいつかは当たり前になってしまいます。というのが、私に今言えることです。

質問 4 : 「高台移転・平地に残ったそれぞれの理由」

高台移転で防災集団移転をした80戸の方々は、10年間で2度津波をかぶっています。二重ローンを負った方もいます。ということもあって、その方々は反対なく一致して高台に80戸行きました。2か所に分散はしたんですけども、それによってコミュニティが分断さ



れたという訳ではないようです。島の担当者の話によるとちょっと離れての方がうまくいくこともあるから、実は前向きな決断として二手に分かれたんだという言い方をしてました。あと平地に残ったそれぞれの理由ってことなんですが、下の町に住みたい方、「漁師は海の近くに住まなきゃだめだ」っていう話もありました。ただ、それで平地に残ったとしても、防潮堤ができたので結局は海が見えない生活になってます。奥尻の場合は防潮堤の議論の前に家をどこに作るかの話になったので、たぶん低いところに残りたいっていう人は

海が見えるイメージで残ったと思うのですが、その後に防潮堤この高さになりましたって示されたので、時間が経つにつれて「あれ、こんなはずじゃなかったのに」っていうふうにおそらくなっていたと思います。というわけで、それぞれの理由があって高台に移転したり残ったりしたんですけれど、もともとのご自身の希望が叶ったかどうかというのはまたちょっと違ったかなというふうに思います。

質問5：「心のケア」ということがもし当時あったらどんなふうなことをしてほしかったか、「分かり合うっていう経験」はありましたか

「心のケア」っていう観点が全くなかったのと、島の外の人が来ても閉鎖的な部分があって、ウチ・ソトの意識っていうのが非常に強いです。奥尻の中でも薄々私が感じるのは、たとえば調査とかでお話に行っても、かなり壁があります。当時のこと聞かせてくださいっていてもすごく壁があるんですが、「実は私当時奥尻に住んでて、漁師をしてる〇〇君と同級生で」とかって言うと身元が判明するので、一気に心を開いてくれるっていうのがあります。ですから、突然「私カウンセラーです」「心のケアの専門家です」っていう人が来ても、当時の奥尻島ではたぶん受け入れられなかったと思います。そういう人にいきなり心を開いて話してもいいものかっていう不安感があったので。だとしたら、島の中でもともとそういう担い手がいたほうがよかったのだろうなと、思います。保健師さんとか非常に頑張ったという話があるんですが、人数も少なかったですし子どもたちのところまでは回ってなかったですし、もしかすると養護教諭の方とかそういう先生方が、当時「心のケア」という観点があればそういう担い手として活躍されると、子どもたちはお話ししやすかったりしたのかなというふうに思います。その場合は、大人たちをサポートする人たちが必要で、まさにS-チルのみなさんのような方々が奥尻にいてくれればよかったなと思います。学校の先生というのは島の人にとっては外の人なので、「話せる外の人」なんです、子どもたちにとっては。学校の先生は島の人ではないので、たぶん島の人ほど、島の外の人に対する抵抗感はないと思うんですね。そうすると、心のケアの担い手の人が島の先生にアプローチして、「こういうサポー

トをするといいですよ」とか「何か困ったら私たちに相談してくださいね」という二段構えにするとよかったのかなというふうに思います。あと、私自身が同じ災害の経験をしていない方と分かり合えた経験があるかっていうことをお聞きいただいたんですけど、私自身は、本当に分かり合えたと思ったのは、神戸に行ったときでした。神戸で、阪神・淡路大震災の被災者の方でしかもご遺族ではなくて、同じようにそれほど被害を受けてないんだけどそれぞれに何か思うところがあって、奥尻のためとか神戸のためとか、被災地のために何かしたいという思いを持った人と話したときに「ああそれ分かる」ということが非常に多くて、その時に私は大きな慰めと励ましを得ました。「自分だけじゃなかったんだ」というところで非常によい経験をさせてもらえましたし、そういう方々とは今もよいお付き合いをさせてもらっていて、神戸に行ってよかったなというのを強く思っています。

質問 6：「大人がどんと構えるにはどうしたらいいですか」

これは非常に私も難しいんですけど、いくつか聞いた話では、これは心理の専門家ではないので必ずしも適切かどうかわからないんですけども、保護者の方の話を見ると、「子どもの前では弱さを見せないように頑張った」というのがあって、それは子どもたちがいたから頑張れた、と。そういう思いを持たれたっていうのは、両面あると思うんですけど、張りとかやりがいがあったというのは非常によかったのかなと。あと、やはり大人の方々が、お母さんたちが集まった時に分かち合うことができたりとか、子どもの前ではどんとしていても、どこか気持ちを吐き出したりする場があったりだとか、そういう相手がいるっていうことが大人がどんと構えるということにつながるんだと思います。決して「子どもの前で強がるな」ということを言いたいわけではないんですけども、みんながみんないつもどんと構えているということではなくて、普段の生活では堂々としていてもどこか気を緩めるところがあったりすると思うので、緩急つけるところをそれぞれがそれぞれ持てるようにサポートのチャンネルが増えるといいのかなというふうに思います。明確な答えではなくて恐縮ですが、そのようなことを思います。

質問 7：「子どもたちの心のケアに関する具体的な話」

本当にあんまりないんですね。ただ学校の先生方のお話の中では、先ほどの校長先生だと、俳句をさせるってことで子どもたちが俳句の中に、普段やってる活動の中で吐き出しができるようにしたりですとか、役場の方が子どもたちに絵を描かせろって、好きに描かせてあげてそれで気持ちの発散ができるならそれでいいじゃないか、って。心のケアの観点を持ってない方がそういうふうに言って、絵を描かせることを推奨したっていう話もありました。また遺族となってしまったお子さんに詩を書いてごらん、何でもいいから書いてごらん、って言って、それをきっかけに、ずっと無口になってしまっていた子が話すようになったって

うケースもあったと聞いています。それは「心のケア」という、たとえばカウンセラーの方とかが来てとかではなくて、気持ちを吐き出すとか出すためのいろんなものを、基本的に普段の学校生活の延長としてさせたっていうのが奥尻島の経験なのかなと思います。

質問 8：「災害を経験した子どもたちの中の心身の障害っていうのはありますか」

私自身が聞いた話では、授業中にフラッシュバックのような症状が出て、国語の教材とかを読んでいるときに突然叫んだりする子がいてパニックのような症状が出る子がいたという話を聞いているんですけども、そういう子も徐々に落ち着いたというふうには聞いています。去年なんですけども奥尻に行って、うちの子もしかして災害がきっかけでパニックとか起こすようになったのかしらと言われた子がいたんですけども、それは災害の影響ではなくてもしかしたら発達上の障害といますか、そういう可能性もあったりするので、ある子を見たときに「この子は災害の影響でこうなっているのか」という、そういうフィルターをかけないっていうことも大切なかなと思います。たぶん皆さんの方がご存じだと思うんですが、成育歴とかいろいろなものを見ていって総合的に判断していくっていうことをしないと、「災害のせいだ」というふうになってしまうともしかするとケアの本質を誤ってしまうのかもしれないなっていうことも思います。

質問 9：「奥尻島の学校は何階建てでコンクリ造か」

ほとんどコンクリで、3階建ての建物が3校ありました。高台にあった学校は大丈夫でした。応援の教員はたぶんいなかったと思います。先生方はそういう意味で非常に大変でしたし、私がいた奥尻は比較的被害が軽微でしたけれども青苗の中学校の先生とかは災害をきっかけに学年が非常に荒れてしまって、当時のことを思い出したくないという先生も実際にいらっしゃいました。奥尻島の場合は校庭に仮設住宅ができるっていうことはなかったので、学校生活への支障っていうのは時間割を組み替えたりするっていうのはしょっちゅうあったぐらいです。もともと奥尻島は時間割がフェリーの運航状況によって変わるっていうことがよくあって、土日に対岸の実家に帰った先生が船が欠航して戻れなかったりすると、もともと時間割がよく変わったんですね。「〇〇先生いないので今日は美術の時間が2時間続きます」とかって調整してました。時間割がけっこう変わったんですけどもそれも普段より回数多いくらいな感じで、割と日常の一コマになっていったかなと。奥尻地区ではそういう感じだったと思います。

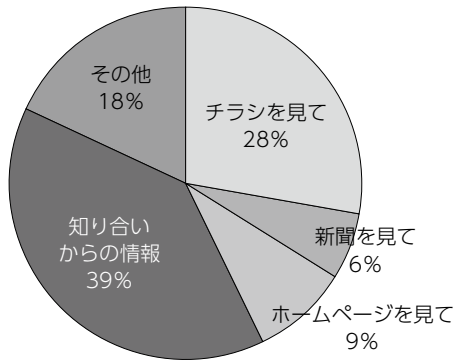
遺体安置所は、学校は基本的には使われなかったんですけど、合宿所、合宿で使われるような町民センターとかに安置された場合があって、何年か後に子どもたちがそこを合宿で使うときに「ここ遺体安置の場所だったんだよね」みたいなふうに先生におっしゃるっていうケースがあったと聞いています。

たぶんまだカバーしきれないところがあると思うので、もしお時間ありましたら終わったあとに個別にお越しいただければできる限りお話ししたいと思います。以上です。

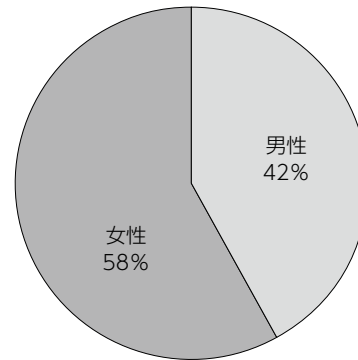


アンケート結果(有効回答33名)

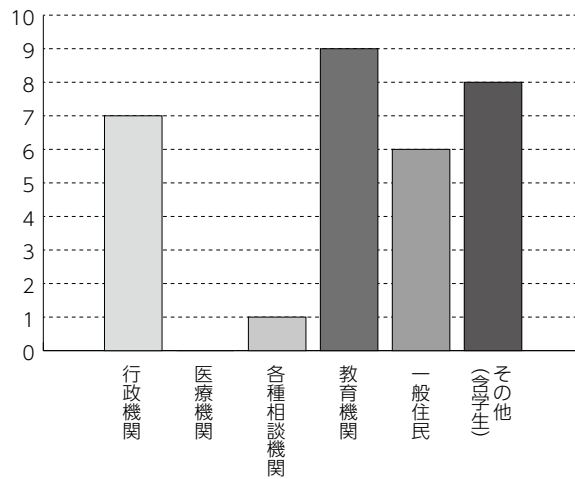
①このたびの研修会を知ったきっかけを教えてください (%)



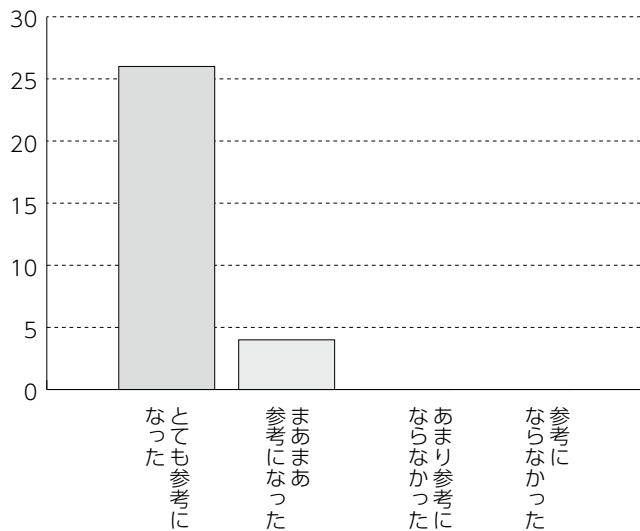
②あなたの性別を教えてください (%)



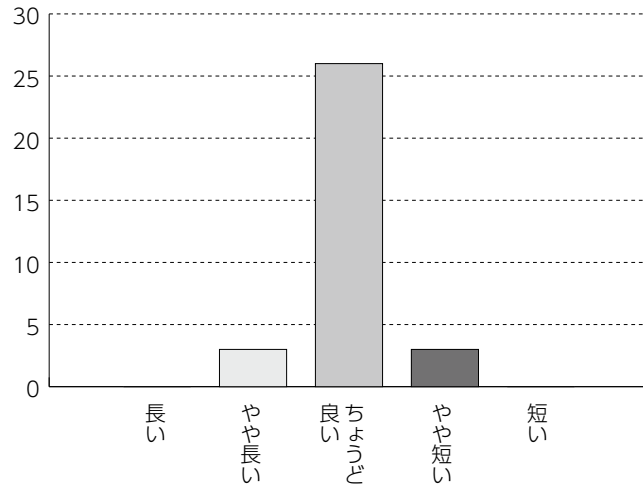
③あなたの勤務先を教えてください (人数)



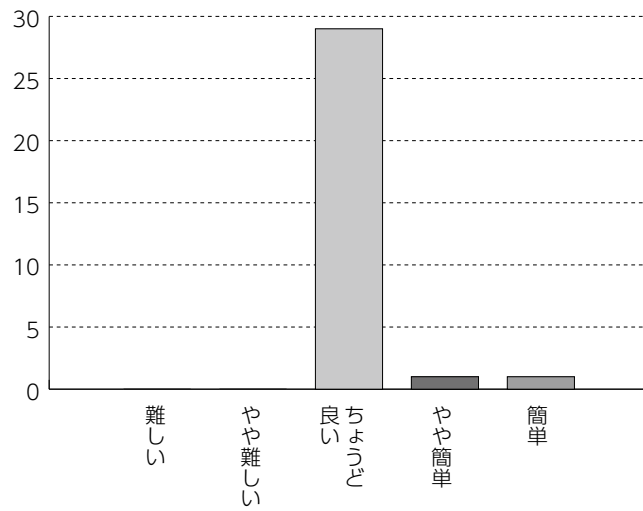
④本日の研修会は全体的にどうでしたか (人数)



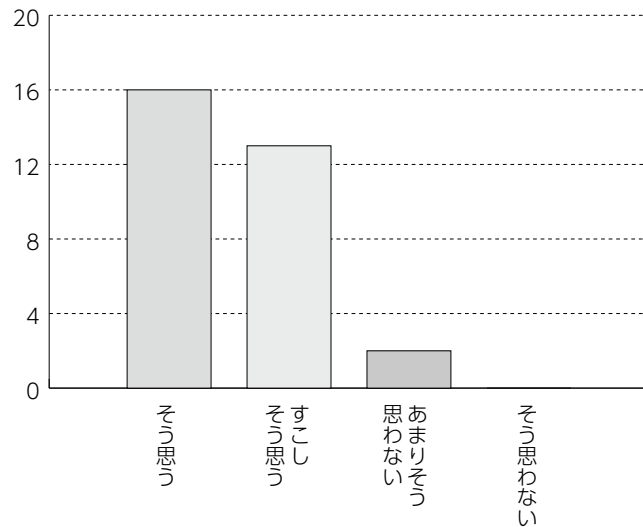
⑤研修会の時間はどうでしたか（人数）



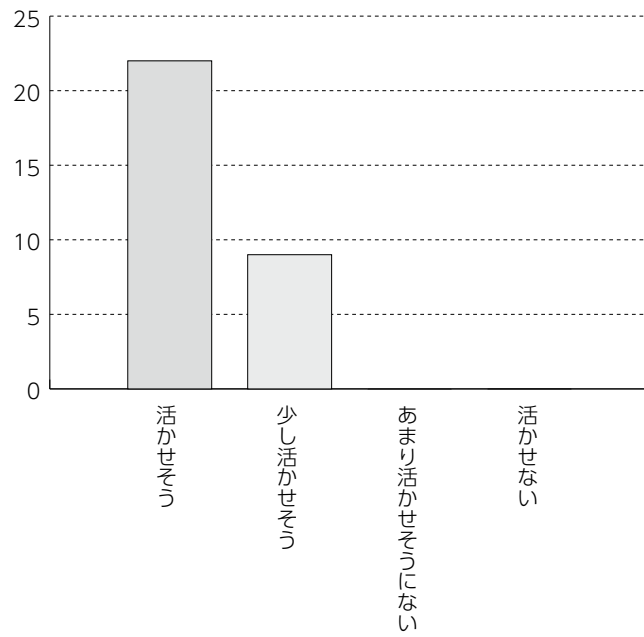
⑥研修会の内容はどうでしたか（人数）



⑦今回の研修会を受けて、震災後のこころのケアについての理解は深まりましたか（人数）



⑧今回の研修会を受けて、今後の活動に活かそうですか（人数）



質問9 今回の研修会で学んだこと、印象に残ったことはなんですか

- ・奥尻島での地震や津波のことをあまり知らなかったので被害の規模が想像より大きかった
ので驚いた。
- ・大人が子ども達をしっかりと受け止める覚悟をしておくことが大切。
- ・子どもといってもどの年代だったのかによって、震災の捉え方が違うのだと知った。
(定池先生は思春期だったのだなと思った。)
- ・普通の教育環境に戻す必要な支援は何か考えなければならぬと思った。
- ・東日本大震災が面としての災害なら、奥尻の災害は点としての災害であると思う。行政は
学ぶことが多いと思う。
- ・大人のどんと構えた態度の大切さを知った。
- ・子どもがいたから被災された方が、成長されたと語られた生の言葉一つ一つ。
- ・体験談として、困難と良い思い出を聞いたこと。
- ・被災した子ども達の多様性、地域に根差した継続的なリサーチ。
- ・非日常という状況を受け入れ、さらに日常を取り戻すことが大切だということが印象に
残った。
- ・被災を経験した子どもたちの前向きに進む姿を知ることができ、とても救われる思いがし
ました。
- ・20年経過して、未だに支援物資が残っているという点。
- ・リクエストを聞くことの大切さについて。
- ・特に津波は3度来ると言われた校長先生のお話は印象に残りました。特にマスコミについ
て。
- ・大人がどんと構えることの大切さについて。普段の生活を豊かにと思いました。
- ・実体験をなさった先生のお話で説得力があり、よかった。
- ・「津波」は3度来たという言葉がとても印象に残った。仕事の中で肝に銘じておきたい言
葉です。
- ・「津波」は3度来た。支援する側と支援される側にバランスが大切だということが印象的
でした。
- ・震災の影響は復興を遂げた時、そこで終わるのではないことを再確認できた。
- ・自分の身の回りで起きることを震災に引き寄せて解釈してしまうこと。
- ・あまり構えず、「通常」と同じように接するのがいいということ。
- ・合唱のように打ち込めるものがあることが、エネルギーの発散に繋がるということ。
- ・子どもたちの持つ力は大きく(周囲の大人がしっかりしていれば)安定して成長していく
力をもっている。→3.11の震災時実際に津波に流されて怪我を負ったりしながらも生き
延びた子ども達(特に小学校～高校生)学校では皆元気に過ごしている子どもの内面がと

でも気にかかっており、この研修会に参加した。反応が出て不登校になっていたりという子はそれなりの対応に結びついたり、相談したいと考える子にはSチルもある。そこに結びつかない子どもたちも地震の力で不安等解消して成長していくと考えても良いと思えば少し安心できるようにも思う。

- ・震災当時中学生だった子どもがどう震災を受け止めたかが聞いて興味深かった。
- ・海産物が食べられなくなったけど、いつの間にか食べていた。何でも災害のせいにするとかケアを誤る。
- ・心理面でのケアも大切ではあるが、どういった日々を過ごし、何を感じ、何を考えているのかなども含め、生活や発達についても改めて理解が大切なんだなと思いました。
- ・「復興」「被災」という言葉の多重な意味、影響について考えさせられました。非日常の中での再生の大切さ。
- ・3つの津波、津波、物資、マスコミ。
- ・学校、教室の中での最大の心のケアは日常の生活を取り戻すこと→私もこのことが一番大事であると思っています。
- ・子どもたちに与えた影響、特に進路状況
- ・奥尻島はクリティカルパスがうまくいった（復興が早かった）のは、道庁のイニシアチブが良かったからかもといったこと。
- ・東日本大震災後、津波被害があった方から過剰な支援は、結局自己満足のためにやっているのではないかと感じる。その人の顔を見るだけでどんな目的で被災地に来たのか、わかるようになってしまったと話されます。まさに、現地に寄りそった支援でなければ支援ではなくなるのだとお話を聞いて感じました。
- ・非日常から日常へ戻るために支援が必要であるということ。（非日常が続くような支援は長期的にはしてはいけないこと）
- ・海が怖い、べた風の静かな夜が怖い等の感覚を改めて認識することができた。震災を機に学校を移った際のことを聞いて、勉強になった。校長先生の様子聞いてよかった。
- ・避難時間のないこと、継承のむつかしさ、（少数の極一部の大人の人に関係なく見える（しかしこれが国乱れの原因、観念）うまく対応する技術が必要。

質問 10 今回の研修を今後どんな形で活かしたいと思いますか

- ・被災者がその周辺地域の方とどう関係していくのかを考えること。
- ・平成20年に発生した内陸地震の記憶と経験を後世に伝えていく仕事をしています。子どもたちにどう防災教育をしていくか、いくつかのヒントを得られました。
- ・長期的な人の観察を視点としてもちたい。
- ・今まで以上に長い目で子どもたちに関わっていきたい。

- ・ポジティブな経験を子どもたちから引き出していけたら。
- ・子どもと接する仕事なので、その時代に応じた対応を心掛けるのはもちろん、今回研修した内容、普通の教育環境、日常とは何かに目を向けながら活かしていきたい。
- ・被災地の教員たちに、このお話の一部でも伝えることができればと思います。
- ・子どもたちと関わる際に、特に被災体験をした子どものことを考える際にも参考になるかもしれないと思いました。有難うございました。
- ・子どもと接することがある職場なので、現場実習に生かせればと思う。
- ・仙台市内沿岸部はまだ被災中であり、支援の必要な状態である。仙台市内住民の意識も徐々に「災後」となる中で、必要な時に必要な支援を提供し住民の自律になるよう、学校支援、学校教育などさまざまな場面で生かしたいと思います。
- ・まもなく震災から2年になりますが、まだまだ復興には時間がかかります。バランスを大切に組み立てていければと思っています。
- ・中学・高校の教員をしているが目に見えない部分に心を配りながら日々の教育活動に活かしていきたい。震災の影響を受け続けていることを受け止める力を育てていきたい。
- ・目標、何かに熱中することをさせたいと思いました。
- ・スクールカウンセラーの現場での子どもと教師支援。
- ・震災時に子どもだった人の心、気持ちがどのように変遷し変化していくのか理解していく参考としたい。
- ・被災体験があると子どもの理解に役立てたい。
- ・今後、ボランティアをする機会があったら、その時に活かしたいし、自分の進路についても活かしたいと思います。
- ・ひとり1人の立ち直りについて、個々の事情を踏まえることの大切さを配慮したい。当事者は一般的には非日常と日常が逆転していることが多く、そこでの震災（非日常）体験であることの意味を考えていきたい。
- ・仕事と地震の心のケア。
- ・あの日、あの時のことを講演する機会があります。その時に活かしたいと思います。
- ・知人等に伝えていきたい。
- ・里親会などの行事で被災した方に寄りそったかたちでの支援を続けていきたいと思います。
- ・元の学校と転校先の学校規模の違いが子ども影響を与えうるという点。学校規模に着目していきたい。また、支援の返礼が負担になるという点にも着目したいと思う。
- ・ボランティア活動に反映します。

質問 11 その他、ご意見・ご感想・ご要望ありましたらお願いいたします

- ・第1回、第2回のシンポジウム（前回までの）の一覧があると良かった。
- ・有難うございました。
- ・貴重な場を有難うございました。
- ・次回も参加したいと思います。
- ・これから20年後仙台市はどうなっているのかわかりませんが、今、しなければならないこと、子どもたちの心のケアに必要なことは何となく見えてきたような気がします。今回は貴重な機会をいただきまして有難うございました。
- ・今日は大変勉強になりました。有難うございました。
- ・復興、復興と盛んに言われているが、そのことが覆い隠している震災にけりをつけたい気持ちを、1人1人がどう受け止めていくかを今後考えていかなければならないのではないかな。
- ・貴重な講演の機会をありがとうございました。
- ・今回定池先生のお話のような震災を以前に体験した方のメッセージは道しるべになると思います。ありがとうございます。
- ・東日本大震災のとき、幼児、学童、小・中・高生徒だった子が、今後、環境の変化とともにどのように変化していくのか同時並行の今を探っていき、ケアの留意点をまとめたい。
- ・貴重な御報告を有難うございました。
- ・有難うございました。
- ・質疑応答は休憩時間各自に書かせて、その人に話してもらって、講師の先生が答える形の方がより学びの場としての一体感が持てたと思います。（交流）
- ・風化させないよう専門の立場からこうした機会を多く設けて欲しい。
- ・復興はこれからもあまり加速しないと思います。東北の人々は行政依存度が他地方の人達より強いと思います。（自分達でという主体性が弱い）
- ・有難うございました。お祈りしています。

編集者

加藤 道代 東北大学大学院教育学研究科教授
震災子ども支援室室長
平井 美弥 震災子ども支援室相談員
押野 晶子 震災子ども支援室相談員
大堀 和子 震災子ども支援室相談員

震災子ども支援室“S-チル”講演会報告書

第3回東日本大震災後の子ども支援
災害を経験した子どもたち
～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～

2013年10月1日

発行者 東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室“S-チル”
代表者 加藤 道代
住 所 仙台市青葉区川内 27-1
Tel/Fax 022-795-3263
E-mail s.children@sed.tohoku.ac.jp

講演会報告書

第3回東日本大震災後の子ども支援 災害を経験した子どもたち

～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～



東北大学大学院教育学研究科 教育ネットワークセンター
震災子ども支援室 “S-チル”

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1

TEL&FAX : 022-795-3263

E-MAIL : s.children@sed.tohoku.ac.jp



この冊子は環境に配慮した
「水なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい植物油インク
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。